

宗像神を祭る神社の全国分布とその解析

－宗像神信仰の研究（1）－

静岡理工科大学 名誉教授
矢田 浩

1. はじめに

平成27年7月28日の文化庁の文化財特別審議会で、「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」が平成29年世界文化遺産登録を目指す候補として選定された。その構成要素としては、「古代対外交渉に関わる祭祀が行われた沖ノ島（とそこからの出土遺物）、祭祀に関わった胸肩（宗像）氏の墓域である津屋崎古墳群（などの関連遺跡）、そして信仰を継承している宗像大社」（平成21年1月の文化庁の暫定一覧表）が挙げられている^(注1)。

古代の宗像と沖ノ島には、多くの謎がある。多くの人々の関心にもかかわらず、その解明はなかなか進展しない。沖ノ島祭祀の開始が、文献の欠如している「空白の4世紀」の出来事であるためである。

『日本書紀』にも、宗像三女神誕生の誓約神話以降は、胸形大神または胸方神についての五世紀代の二・三の説話^(注2)が載るのみで、そのあとは天武紀まで登場しない。『古事記』には、上つ巻の神話以降は全く登場しない。

文献と考古学の隙間を埋めるものとして、神と神社に注目することが重要ではないか。宗像の謎の核心は、宗像大社とその祭る神にある。日本の多くの神々が、前史時代に起源を持つ。宗像神もそうであるように思われる。日本古代の神信仰は長い時の間に多くの変遷を経てきたが、人々は原則として一度祭った神を捨て去ることをしなかった。神のたたりをおそれたためであろう。このため、その神を祭る神社がなくなても、あるいはそれを祭っていた人々がいなくなっていても、一度祭られた神の名は、多くの場合他の神社に合祀されるなどして残っている。筆者の実感では、その遺存率は考古遺物や歴史史料より遙かに高いと思われる。

これまでの神社研究は、主に文献に名がある各地の著名社について行われてきた。しかしこれら諸社についての由緒等の文書は、その古来の権益の主張や政治的な意図、あるいは関連祭祀氏族間の争いなどを反映している場合が多く、鎮座当時の姿を正しく伝えているものは少ない。むしろこれら著名社から広まった多くの末社の祭神が、古代の信仰の跡を留めているように思われる。

古代以降目立った活躍のない宗像族が祭る神が、南西諸島を除く全国に広く分布していることは、その顕著な例と考えられる。海神とされている宗像神が、海のない群馬・栃木・奈良の諸県にも多く祭られている。このような広い分布の一端は、平安時代に作られた『延喜式神名帳』などの古代の記録にすでに示されていて、宗像神の全国への普及が古代以前に遡ることを裏付ける。

宗像神信仰については、『宗像神社史（上）・（下）』[1]に詳述されて以来、これに続く研究はそれほど見あたらない。本研究も同書を出発点とするが、同書の性格上宗像神についての様々な謎に深く踏み込むことは控えられている。本研究ではその後公表された神祇資料の解析を中心とし、関連すると思われる最新の考古学的知見などを援用し、宗像神と関連神信仰の解析と実地調査を通じて、制約されない視点から古代の宗像と沖ノ島についての謎に迫ろうとするものである。

本報では、まず宗像神信仰の全国的な拡がりを検討する。なお歴史的に「宗像」は旧宗像郡の範囲を指すが、この地域は古代には胸肩・胸形・宗形などと書かれ、これらの表記は現在でも各地の神社名や地名・神名・人名に残っている。そこで本報では、これら地名等を総称してムナカタと呼ぶことにしたい。ムナカタの地域は、時期によって旧宗像郡域を越えて拡がることがある。

全国の宗像神を祭る神社の分布については、昭和19年に宗像神社の調査による『宗像三神奉齋神社調』[2]（以下『調』）がある。これによると、全国の宗像神を祭る神社は6312社となっている。この数は、境内摂・末社を含む数字であり、本殿に祭るのは4370社である。しかし『宗像神社史』はこれに言及しながら、祭神の認定に不備があるとして採用していない。

『調』は明治期に全国で作られた「神社明細帳」に基づくとしているので、「神社明細帳」の全貌が一般に閲覧できない現状では貴重な記録である。しかし他神が全く記されていないことや、宗像神の名が同一表記に書き換えられているなど、詳細な解析の基本データとしては問題がある。本報では、必要に応じて参考資料として用いることにする。

なお『宗像神社史』は、分祠社の例として宗像神を祭る神社として歴史史料に出る19社およびムナカタの名を冠する90社などを挙げている。これらについても、最近の史料に基づいて検討する。

2. 基礎資料と解析方法

全国の神社のほとんどを統括する神社本庁が、所属する神社7万8960社の祭神、祭礼、由緒などを調査し、デジタル化して『平成「祭」データ』（以下『平成データ』と表記）として公表している[3]。本報では、最近公開されたそのWINDOWS版を基礎資料とした。なおこの調査には境内摂・末社のデータもあるが、個々の実例を見ると必ずしも全ての社について記入されてはいないようなので、以下の解析は本殿に祭る神のみについて行った。

この調査では祭神名は当該社の申告通りに記載されているので、同一神に多種多様な表記がある。表1に宗像神と判定した全ての表記を示す^(注3)。これらの表記は、『日本書紀』と『古事記』とに挿っている^(注4)。表2に両書に現れる全表記を示した。現在宗像大社は三女神を、『日本書紀』神代紀第六段本文に従って

と表記する^(注5)。この各神に対応する表1の表記群を、それぞれタゴリ・タギツ・イチキシマと呼ぶことにする。表1で、固有名で呼ばれる各神の表記は、表2の各書の表記から採られた（あるいは模された）ものと見られる。同表でAに分類したのは『日本書紀』の各書に、Bに分類したのは『古事記』にそれぞれ拠った表記と見られる。Cは、いずれに拠ったかの判定が難しい表記である。

表1 宗像神を本殿に祭る表記別神社数

タゴリ	社数	タギツ	社数	イチキシマ	社数	その他(1)	社数	その他(2)	社数
A	田心	700	732	A 市杵島	2318	2318	奥津島	22	宗像三(女)神
	田霧	27		市寸島	324	481	中津島	17	宗像(数不明)
	田凝	5		狭依	157		瀛津島	10	宗像姫
B	多紀理	477	629	市岐島	72		澳津島	2	宗像仲津姫
	多岐理	135		市木島	6		興津島	2	宗形(三神)
	多記理	7		市伎島	5		辺津島	2	宗形(数不明)
	多伎理	3		伊都岐島	10		激津島	1	宗形(二神)
	多喜理	3		伊都伎島	4				嚴島三神
	多紀利	1		伊知岐島	4				(三柱)女神(ヒメ)
	多紀岐利	1		一杵島	3				道主貴
	多古理	1		一寸島	2				
	多古利	1		一伎島	1				
	田紀理	4		厳島(数なし)	98				
C	田岐理	1	6						
	田許理	1							
計	1367	計	1253	計	3004	計	56	計	263
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・姫・媛・比売・比咩・比女のいづれかが附く ・さらに神・大神または命・尊が附くことが多い ・島は嶋・島・志麻と表記することがある ・Aは『日本書紀』の各書に、Bは『古事記』に拠った表記 Cはいづれに拠ったか判定できない表記 								姫以外は原則として神または大神が付く
								総神数	6433

表2 記紀の三女神の表記

書	日本書紀神代紀				古事記
	第六段 本文	同 第一の一書	同 第二の一書	同 第三の一書	
生まれた女神名 (順序と鎮座地)	田心姫	瀛津嶋姫 (おきつしま)	市杵嶋姫…遠瀛 (おきつみや)	瀛津嶋姫 (市杵嶋姫)	多紀理毘賣(奥津島 比賣)…胸形奥津宮
	湍津姫	湍津姫	田心姫…中瀛 (なかつみや)	湍津姫	市寸島比賣(狭依毘 賣)…胸形中津宮
	市杵嶋姫	田心姫	湍津姫…海浜 (へつみや)	田霧姫	多岐都比賣…胸形 辺津宮
その他		日神の神勅 (道中)		海北道中 (道主貴)	

これを見ると、全体として宗像大社が採用している『日本書紀』の表記が多数であることがわかる。

江戸期以前は、『古事記』に拠った表記は殆ど見られなかった。明治神祇制度下で地域ごとに「神社明細帳」を作成させたとき、祭神記載の際に国学派の担当官が『古事記』風の表記に準拠するよう指導したものと見られる。江戸期の記録には祭神名が明記されていなかった社も多かったし、神仏混淆社では祭神の変更を指示されたケースも多かった。後述の八王子信仰社の宗像神の多くが、『古事記』に拠った表記となっているのはその例である。祭神の記録があっても、表記を変更させられた場合も多かったようである。宗像大社さえも、昭和32年まで『古事記』の表記を用いていた。

表1の各表記で検索したデータを、Excelに変換して都道府県ごとに集計し、宗像神同士の重複を除いて宗像神の1柱以上を祭る全神社数、および三女神の全てを祭る数と、そのうち三女神を祭る数を求めて表3中に示す。その他必要により他神や社名および通称などについても同様に検索し、集計した。

地域ごとの宗像神信仰の強さを見るため、各都道府県の『平成データ』の総神社数との比を求め、表3中に示した。ここで問題になるのは、明治神祇制度下で1村1社を目指して神社の合祀が推進されたことである。『神道史大辞典』[6]によると、全国の神社数は明治14年から明治39年まで19万社前後であったが、明治40年以降急激に減少して昭和20年には10万9733社となっている。ただし合祀により社が廃止されてもその祭神の名を合祀社に残しているので、村社以上の社には30柱以上の祭神が祭られている例がかなりある。

合祀が強力に推進される以前の明治39年の神社数を、表3中に比較として示した。都道府県で合祀の実施状況に大きな差があることがわかる。『平成データ』の神社数の明治39年の全神社数に対する減少率が、沖縄県の95%を最高に和歌山県の89%、三重県の87%など13都道府県が70%以上を示すのに対し、7都道府県は30%以下に止まっている。このような神社数減少の影響も考慮して検討する必要がある（この中で明治以降の入植の影響があると見られる北海道と、米軍占領などの事情によると見られる沖縄県は以下除外して議論する）。

表3 宗像神を祭る全国の神社数と祭神の内訳

	全神社数			宗像神を祭る神社数と全神社数との比			宗像神を祭る神社のうち三女神を祭る神社数	宗像神を祭る神社のうち八王子信仰社数	八王子信仰社を除いた宗像神を祭る神社数とその内訳										
	平成7年登録神社数	明治39年登録神社数	減少率(%)	宗像神の一神以上を祭る神社数	対平成全神社数比(%)	対明治全神社数比(%)			宗像神を祭る神社(八王子除く)のうち八王子信仰社数	宗像神を祭る神社(八王子除く)のうち八王子除く三神	比率	タゴリ単神	タギツ単神	イチキシマ単神	タゴリ+タギツ	タゴリ+イチキシマ	タギツ+イチキシマ		
北海道	600	578	-4	38	6.3	6.6	4	0	38	6.3	6.6	4	10.5	0	0	32	0	0	
青森県	730	839	13	17	2.3	2.0	10	0	17	2.3	2.0	10	58.8	0	0	6	0	0	
岩手県	857	1186	28	19	2.2	1.6	2	0	19	2.2	1.6	2	10.5	0	1	15	0	0	
宮城県	961	2627	63	16	1.7	0.6	2	0	16	1.7	0.6	2	12.5	0	1	11	0	0	
秋田県	1135	4790	76	33	2.9	0.7	8	0	33	2.9	0.7	8	24.2	8	1	15	0	0	
山形県	1742	3199	46	42	2.4	1.3	9	0	42	2.4	1.3	9	21.4	1	0	28	0	0	
福島県	3046	4448	32	42	1.4	0.9	9	3	39	1.3	0.9	6	15.4	3	1	23	0	0	
茨城県	2467	4344	43	67	2.7	1.5	0	0	67	2.7	1.5	0	0.0	3	1	62	1	0	
栃木県	1909	6004	68	114	6.0	1.9	4	0	114	6.0	1.9	4	3.5	61	0	48	0	1	
群馬県	1211	4022	70	122	10.1	3.0	14	4	118	9.7	2.9	10	8.5	2	1	104	0	0	
埼玉県	2012	7377	73	117	5.8	1.6	23	7	110	5.5	1.5	16	14.5	2	0	91	0	0	
千葉県	3160	6645	52	88	2.8	1.3	22	0	88	2.8	1.3	22	25.0	1	1	64	0	0	
東京都	1411	2530	44	31	2.2	1.2	2	1	30	2.1	1.2	1	3.3	1	0	28	0	0	
神奈川県	1128	2608	57	32	2.8	1.2	7	3	29	2.6	1.1	4	13.8	0	2	22	0	0	
新潟県	4782	8234	42	80	1.7	1.0	10	2	78	1.6	0.9	8	10.3	5	11	50	0	2	
富山県	2163	3790	43	23	1.1	0.6	1	0	23	1.1	0.6	1	4.3	3	0	19	0	0	
石川県	1912	2834	33	47	2.5	1.7	6	3	44	2.3	1.6	3	6.8	2	6	28	0	3	
福井県	1747	2825	38	31	1.8	1.1	6	2	29	1.7	1.0	4	13.8	0	2	23	0	0	
山梨県	1299	1848	30	23	1.8	1.2	18	17	6	0.5	0.3	1	16.7	2	0	2	0	0	
長野県	2466	6831	64	45	1.8	0.7	17	10	35	1.4	0.5	7	20.0	3	1	23	0	1	
岐阜県	3229	6794	52	42	1.3	0.6	24	24	18	0.6	0.3	0	0.0	0	0	18	0	0	
静岡県	2822	3880	27	95	3.4	2.4	50	35	60	2.1	1.5	15	25.0	2	3	35	0	1	
愛知県	3319	5046	34	189	5.7	3.7	129	111	78	2.4	1.5	18	23.1	2	1	52	2	0	
三重県	828	6489	87	296	35.7	4.6	185	162	134	16.2	2.1	23	17.2	3	2	101	0	0	
滋賀県	1440	2872	50	48	3.3	1.7	9	1	47	3.3	1.6	8	17.0	0	3	22	0	0	
京都府	1597	2900	45	52	3.3	1.8	23	12	40	2.5	1.4	11	27.5	3	1	24	0	0	
大阪府	573	1886	70	33	5.8	1.7	3	3	30	5.2	1.6	0	0.0	0	0	28	0	1	
兵庫県	3845	7424	48	132	3.4	1.8	28	18	114	3.0	1.5	10	8.8	5	2	96	0	1	
奈良県	1323	1885	30	75	5.7	4.0	18	16	59	4.5	3.1	2	3.4	3	1	50	0	2	
和歌山県	425	3721	89	82	19.3	2.2	4	2	80	18.8	2.1	2	2.5	0	0	73	0	2	
鳥取県	822	1613	49	51	6.2	3.2	19	7	44	5.4	2.7	12	27.3	4	3	21	1	0	
島根県	1163	3151	63	135	11.6	4.3	71	42	93	8.0	3.0	29	31.2	2	3	51	1	0	
岡山県	1626	9426	83	75	4.6	0.8	42	7	68	4.2	0.7	35	51.5	1	3	26	1	1	
広島県	1887	9520	80	258	13.7	2.7	123	18	240	12.7	2.5	105	43.8	5	5	118	2	1	
山口県	742	2588	71	169	22.8	6.5	135	7	162	21.8	6.3	128	79.0	2	1	28	1	0	
徳島県	1324	4198	68	25	1.9	0.6	9	2	23	1.7	0.5	7	30.4	0	1	15	0	0	
香川県	774	3469	78	47	6.1	1.4	16	1	46	5.9	1.3	15	32.6	1	0	27	0	2	
愛媛県	1247	5376	77	168	13.5	3.1	119	26	142	11.4	2.6	93	65.5	2	3	39	1	4	
高知県	2178	6225	65	71	3.3	1.1	33	18	53	2.4	0.9	15	28.3	1	1	33	0	0	
福岡県	3364	7758	57	141	4.2	1.8	68	17	124	3.7	1.6	51	41.1	7	1	53	1	2	
佐賀県	1092	3549	69	72	6.6	2.0	35	0	72	6.6	2.0	35	48.6	3	0	34	0	0	
長崎県	1278	1656	23	49	3.8	3.0	25	2	47	3.7	2.8	23	48.9	0	1	17	0	0	
熊本県	1382	4708	71	36	2.6	0.8	21	3	33	2.4	0.7	18	54.5	0	1	13	1	0	
大分県	2140	3175	33	116	5.4	3.7	41	11	105	4.9	3.3	30	28.6	6	2	61	0	3	
宮崎県	654	878	26	23	3.5	2.6	5	4	19	2.9	2.2	1	5.3	2	0	16	0	0	
鹿児島県	1137	2279	50	25	2.2	1.1	12	6	19	1.7	0.8	6	31.6	0	2	10	0	0	
沖縄県	11	240	95	0	0.0	0.0	0	0	0.0	0.0	0.0	0	0.0	0	0	0	0	0	
合計	78960	190265	58	3532	4.5	1.9	1421	607	2925	3.7	1.5	814	27.8	151	69	1755	12	26	

・数字の太字は上位5位を示す

3. 結果および考察

3.1 八王子信仰社の除外

表3に見るようく、全国の宗像神を祭る神社は3532社を数える^(注6)。しかしその分布を見ると、やや違和感がある。最も多いのは三重県の296社で、以下広島県の258社、愛知県の189社の順で、福岡県は6番目の141社である。各都道府県での全神社数との比率で見ると、三重県は実に35.7%の神社が宗像神を祭っていて、福岡県は平均以下の4.2%に過ぎない。明治末期の大合祀の影響を小さくするため明治39年の総神社数との比で見ると、和歌山県や三重県など遠方の県の突出は小さくなるが、依然福岡県は平均以下である。

東海地方など遠方で異常に宗像神を祭る比率の高い諸県の社名には、八王子または八柱を名前に持つ神社が多く見られる。これらの名を持つ神社は全国で256社あり、うち195社が三女神を祭っている。その中では愛知県の64社、静岡県の26社などが多い。これらの神社の全てが、記紀神話であまてらすおおみかみ すさのおのみこと 天照大神と素戔鳴命（『古事記』に須佐之男、以下スサノオ）とが行った誓約の際に三女神と共に出生した五男神を共に祭っている。すなわち、この八柱または八王子とは、誓約で生まれた八神の意味なのである。

東海地方などで祭られていた八王子は、本来祇園信仰の祭神牛頭天王の八人の王子の意味であった^(注7)。明治神祇制度下で神仏の分離が強制され、牛頭天王も殆どがそれと習合していたスサノオに名を変えられた。そしてその子神の八王子も、誓約で生まれた八神にすり替えられた。

従って、三女神を祭り八王子または八柱を名前に持つ神社は、本来の宗像神信仰社ではないことが明らかである。異なる名を持つ神社でも、三女神五男神がセットで祭られている場合は、牛頭天王の子神の八王子であった場合が殆どと考えられる。このような八王子信仰と考えられる社を抽出して表3中に示す。以下の解析は、八王子信仰社607社を除いた2925社について行うことにする（八王子神を含む場合でも、これとは別に宗像神を含む場合は除外しなかった）。

八王子信仰社を除いて都道府県別に宗像神を祭る神社数の明治39年の神社数神社数に対する比率を見ると、山口県が6.3%と最も高く、以下大分・奈良・鳥取の順となる。遠方での突出した高率はなくなるので、このようなデータ処理がほぼ妥当であると考えられる。福岡県は1.6%と依然としてほぼ全国平均並みになる。

八王子信仰社を除くと、宗像神が最も多く祭られているのは広島県の240社で、以下山口県・愛媛県・三重県・福岡県の順となる。福岡県を信仰の出発点と仮定すると、宗像信仰は周防灘から瀬戸内へ集中的に拡がったように見える。

3. 2 三女神の祭られ方

上記の誓約神話では三女神はほぼ同時に出生したことになっていて、宗像大社もこれを社伝としている。三女神がこの神話のように揃って祭られている神社はどの程度あるだろうか。表3中に、三女神が全国でどのように祭られているかを示した。上述の八王子信仰社を除くと、三女神を全て祭る神社は814社で、全体の約28%に過ぎない。三女神を祭る神社の比率が多いのは、青森県を除けば西日本の諸県が多く、特に山口県では79%に達する。

最も多いのは、三女神のうちイチキシマのみを祭る神社で、1755社と全体の60%を占める。その比率は遠方の諸県で高く、北海道・東京都・大阪府と茨城・群馬・埼玉・富山・岐阜・三重・兵庫・奈良・和歌山・宮崎の諸県では80%以上がイチキシマー神を祭る。タゴリのみを祭る神社は151社あるが、栃木県に61社が集中していて、他には少ない。タギツのみを祭る神社は69社と少なく、北陸地方にやや多く分布する。このように少なくとも一部の地方では、三女神のそれぞれが選択的に単独で祭られてきたことがわかる。二神の組み合わせはさらに少ない。また注目されるのは、宗像神の海神のイメージにもかかわらず、栃木・群馬・埼玉など、海のない諸県に多くの宗像神が祭られていることである。

このような分布の特徴を図1に示す。三女神を祭る神社が多いのは中国地方西部以西であり、それ以東では少数の例外を除きイチキシマー神の比率が圧倒的に多い。このことは、イチキシマ信仰の伝播が古い時期にあって、その後宗像神社の三神化がその近隣諸地方に波及した、と解釈できよう。そして他の二神も、三神化以前にそれぞれある程度の信仰域を持っていましたと見られる

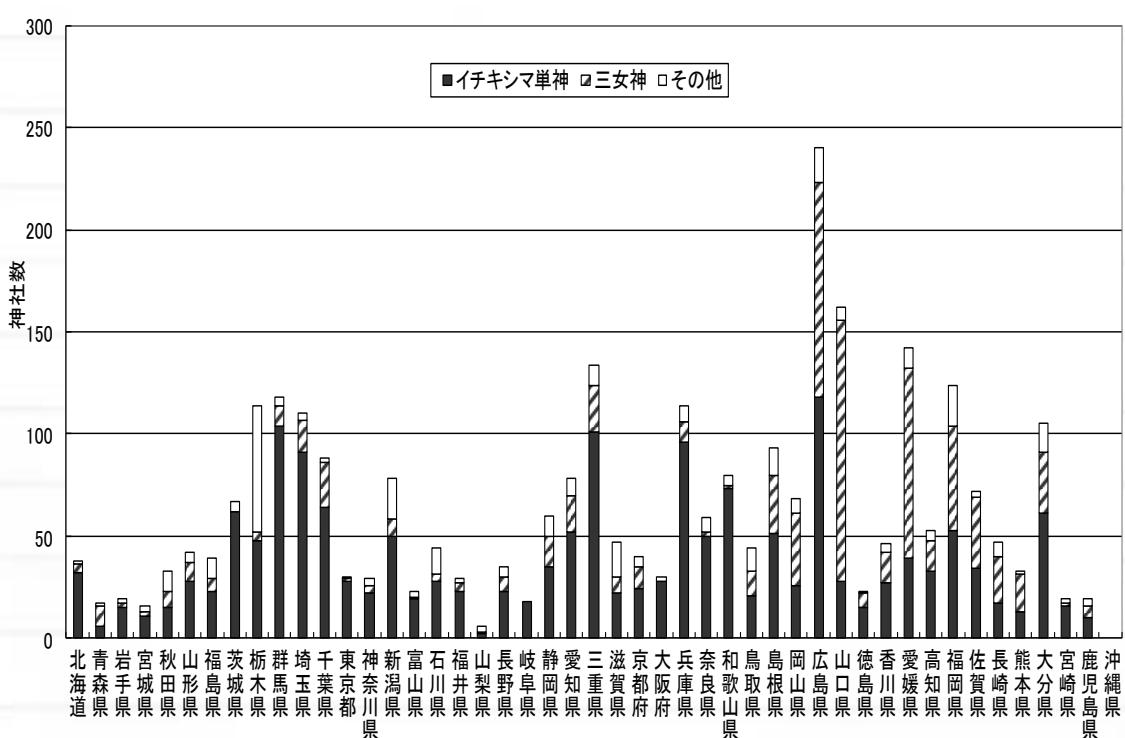


図1 ムナカタ神の一神以上を祭る神社の全国分布とその内訳（八王子信仰社を除く）

3. 3 厳島信仰との関係についての考察

厳島信仰も、宗像神の普及に大いに寄与したと考えられる。現在の安芸の厳島神社の祭神は、宗像大社と同一の三女神である。しかし延喜式神名帳^(注8)の伊都伎鳴神社は一座であるので、『宗像神社史』はその社名から、はじめ市杵島姫命が祭られ、後に三神となったと推定している。安芸の厳島神社が三神の順序が市杵島姫命・田心姫命・湍津姫命としているのも、市杵島姫命を特別視していることを示す。明治時代の神社明細帳に拠っている『調』にも安芸の厳島神社の祭神をイチキシマ一神とするので、三女神となったのは比較的新しいようである。神名については別報で議論するが、イチキシマの語源が「齋く島」とされていることからも、『宗像神社史』の推定は正しいと思われる。由緒については様々な説があるが、ここでは『宗像神社史』に従って宗像神(イチキシマ)が勧請されたものとする。

厳島系の名を持つ全国の神社は、650社が数えられる。これは社名がイツクシマ・イツキシマ・イチキシマと発音される神社の合計である。「厳島」にも様々な異字体があり、その発音もこの3種類ある。神名「市杵島」を表す社名にも前述のように多くのバリエーションがあり、発音も上記3種がある。これら表記を「厳島系」と「市杵島系」に分類すると、前者が573社で後者が77社になる。しかしこれら社名・神名相互間には、はっきりとした境を置くことができない。

上の社名の読みのバリエーションは、イツクシマ→イツキシマ→イチキシマと音韻変化をしたと考えることができよう^(注9)。このことは、安芸の厳島神社の社名が、延喜式神名帳などに伊都伎鳴・伊都岐島など中間の発音の表記で書かれていることからも察することができる。全国に広まった「厳島神社」の表記は、比較的古い発音に基づく表記を残しているのではないか。祭神として 嶽島神などとも書かれるのも、古い発音を残しているものと思われる。

厳島系社の祭神は、イチキシマ一神が472社(厳島神の18社を含む)と全体の75%で、他にタゴリ一神の5社、タギツ一神の2社などがある。三女神を祭る社は116社で全体の18%に過ぎない。都道府県別の分布を図2に示す。宗像神全体と同様に、三女神は東瀬戸内を中心とする西日本にやや多く、東部瀬戸内以東はイチキシマ一神が圧倒的に多い。このことははじめ安芸の厳島神社に伝えられた宗像神がイチキシマ一神であり、ここを経由して伝播したときもその一神であったことを示唆する。

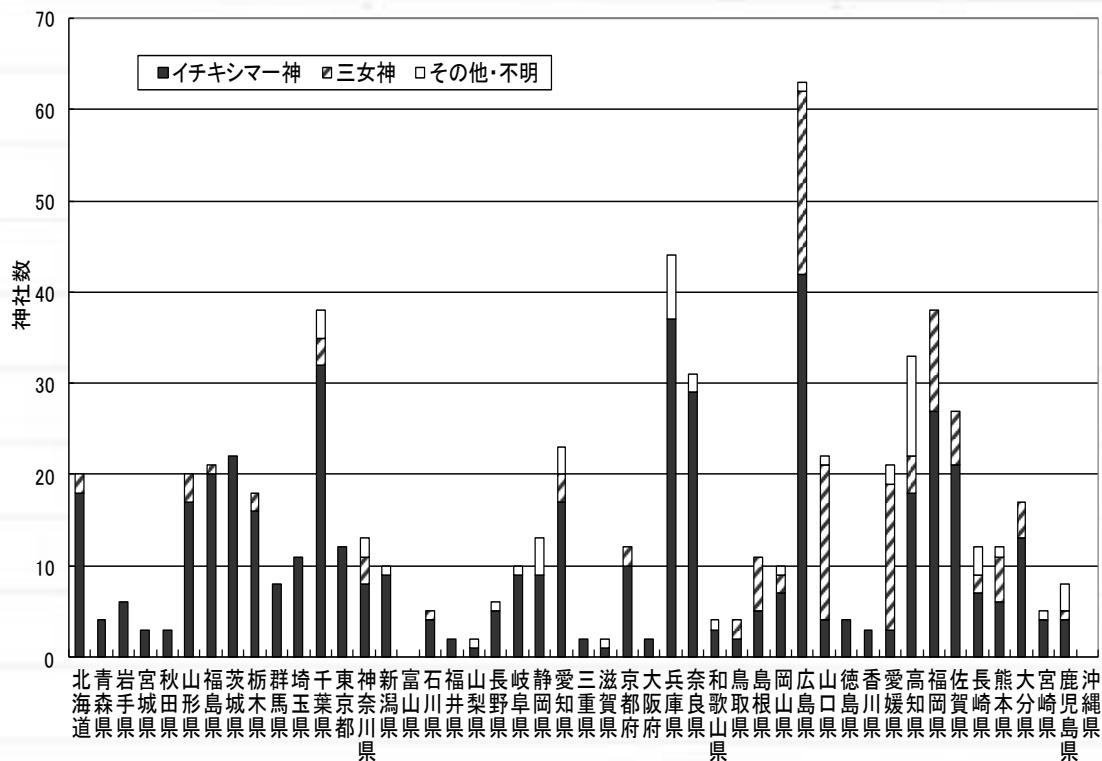


図2 厳島系の神社とその祭神の都道府県別の分布

以上のことから、厳島信仰は宗像神信仰の一類型であって、両者の間にはっきりとした線を引くことは難しいと言える。また「いつくしま」の名を持つ神社でイチキシマ一神を祭るのは406社であり、全国のイチキシマ一神を祭る神社の23%に過ぎないので、イチキシマ信仰の大勢は安芸の厳島信仰とは独立に（おそらくそれより古く）全国に広まったものと考えてよいであろう。

3. 4 弁天信仰との関係についての考察

安芸の嚴島神社は、日本三大弁天（弁才天）として知られている。全国の嚴島系神社にも、弁天または弁才天と呼ばれた神社が多い。弁才天とは、もとはインドの川の神サラスヴァティーである。それが仏教に取り込まれ、中国経由で日本に入ってきたのは奈良時代とされる。平安時代に日本の女神と習合し、嚴島神社のイチキシマも弁才天と見なされるようになった。さらに平安末期以降「才」が「財」と同音であることから弁財天とも書かれるようになり、室町時代以降は七福神の一神として日本国中に信仰が広まった^(注10)。

『平成データ』に登録されている神社のうち、218社に弁（才）天の通称が記録されている。このうちの85%の186社に宗像神が祭られている。うち154社はイチキシマ一神を祭っていて、厳島系の名を持つ神社は145社である。弁天信仰がイチキシマと、そして厳島系神社と強い縁があることがわかる。

図3に、厳島系神社のうち弁（才）天の通称を持つ全国の神社の分布を示す。弁（才）天の名は東国に多く残っており、東国が弁天信仰の影響を強く受けていたことがわかる。ただしこれは、弁（才）天を

祭る神社が創始されることを意味するものではない。後に実例で示すように、あくまで宗像神が先に祭られていて、それに弁(才)天が習合したと考えられるのである。またこれは、西国で弁天信仰が普及しなかったことを意味するものでもない。江戸時代中期の『筑前続風土記付録』[9]には、宗像系神社や厳島神社とは別に弁天社や弁天堂が記録されているが、その多くは明治時代以降に残っていない。

このように弁天信仰は、現在祭られている宗像神を祭る神社数に、大きな影響を及ぼしてはいないと考えられる。

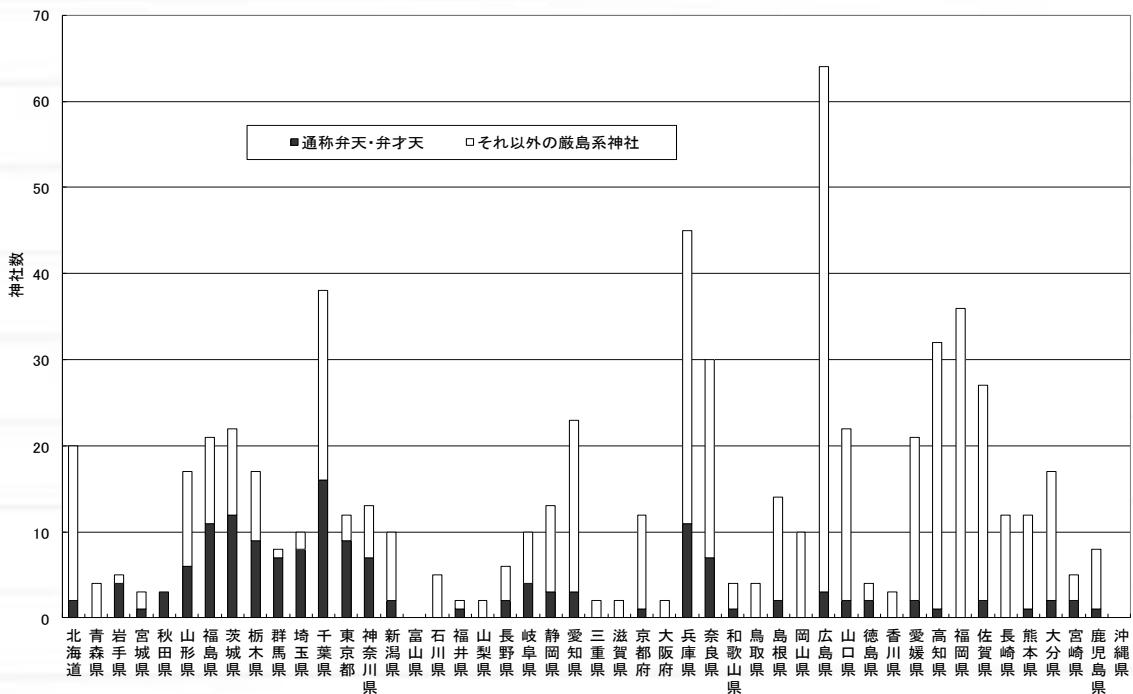


図3 厳島系神社のうち弁(才)天の通称を持つ全国の神社の分布

3.5 全国のムナカタの名を持つ神社と純宗像系社の分布

表4に、全国のムナカタの名を持つ神社の一覧を示した^(注11)。参考に『宗像神社史』に挙げている一覧表の90社（うち九社は摂・末社）をも示した。宗像神を祭る神社が3500社を越えるのに比べると、きわめて少ないと驚かされる。後に示すように、これは古層の神々の特徴である。この中で、遠方の青森県、千葉県などで多いのが目につく。特に青森県では、「胸肩」という古名の神社が七社（『宗像神社史』では九社）あるのが特に注目される。これらの県については、後で別途検討する。

『宗像神社史』に挙げられて『平成データ』にない神社には、実際に廃社になっていることが確認できる例がある。山口県の2社のうち、宇部市東万倉の宗像神社は西方倉の宮尾八幡宮に合祀され、下関市武久の宗像神社は同市幡生の生野神社の境内末社となっている。九州で唯一の古名を持っていた上五島町の中通島浦桑にあった胸肩神社は、台風で倒壊して廃社となり、近くの祖父君神社に合祀

されていた。本殿に合祀された場合は原則として祭神名として残るが、境内末社となった場合は記録が残らない限り次第に社名や神名が忘れられることが多い。早い時期に包括的な調査が必要である。

表4 ムナカタの名を持つ全国の神社

県名	社名表記						祭神(3女神以外の場合)	『宗像神社史』との異同		
	胸肩	胸形	宗形	宗像	宗方	小計		社数	『平成データ』	『神社史』
青森県	7	0	0	1	0	8	黒石市の宗像神社はイチキシマ	10	胸肩2社	
福島県	0	0	0	4	0	4	会津若松市・喜多方市・湯川村の宗像神社はイチキシマ	7	宗像3社	
茨城県	0	0	0	1	0	1	イチキシマ	1		
栃木県	0	2	0	0	0	2	鹿沼市の胸形神社はタゴリ	1	胸形1社	
群馬県	0	1	0	1	0	2		2		
埼玉県	0	0	0	2	0	2		1		宗像1社
千葉県	0	0	0	13	0	13	印西市船尾の宗像神社はイチキシマ	13		
長野県	0	0	0	0	0	0		1	宗像1社	
新潟県	0	0	0	2	0	2	新潟市西蒲区松野尾の宗像社はイチキシマ、同じく矢島の宗像社タゴリ・イチキシマ	3	宗像1社	
福井県	0	0	0	2	0	2	若狭町生倉の社はイチキシマ	3	胸肩1社	
静岡県	0	1	0	3	0	4	焼津市の宗像神社はイチキシマ	4		
愛知県	0	2	0	1	0	3	豊田市平戸橋町の胸形社はイチキシマ、同池島町の四形(脣形)神社はタゴリ	4	宗形・宗像各1社	胸形・宗像各1社
京都府	0	0	0	1	0	1		1		
奈良県	0	0	0	3	0	3	宇陀市菟田野と川上村の宗像神社はイチキシマ	4	宗像1社	
鳥取県	0	0	1	0	0	1		1		
岡山県	0	0	4	0	0	4	赤磐市今井の宗像神社は奥津比売	6	胸形1社宗像2社	宗形1社
広島県	0	0	0	2	0	2	三次市の宗像神社は宗像神なし	3	宗像1社	
山口県	0	0	0	0	0	0		2	宗像2社	
香川県	0	0	0	0	0	0		1	宗像1社	
愛媛県	0	0	0	1	1	2	今治市宗方の宗方八幡神社は宗像神なし	2		
高知県	0	0	0	1	0	1	土佐市本村の宗像神社は祭神記載なし	1		
福岡県	0	0	0	4	0	4		4	宗像1社	宗像大社
長崎県	0	0	0	6	1	7	諫早市宗方の宗方神社は宗像神なし	6	胸肩1社	宗像・宗方各1社
熊本県	0	0	0	0	1	1	山鹿市宗方の宗方八幡宮は宗像神なし	0		宗方1社
計	7	6	5	48	3	69		81		
備考	会津若松市の宗像神社、豊田市池島町の四形(脣形)神社はムナガタと読む							宗像大社を加え独立社82社		

神社名にムナカタがある神社は多くないが、社名にムナカタがなくても、宗像神のみを祭り本来宗像神の神社と考えられる社がかなり多く発見できる。そのような全国の「純宗像系」神社を、主に『平成データ』に基づいて抽出した結果を、表5に示す。ムナカタ(ムナガタ)社と合わせると390社となる。このほかにも本来宗像神のみを祭る神社と思われるが他神を併祭する神社があり、この数が400社を超えることは確実と思われる。これに巖島系社のうち宗像神のみを主祭神とする563社を加えると、現在950社以上が純宗像系神社として存続していることになる。巖島系社は広島・兵庫・千葉の諸県

で多く、このためこれら諸県は純宗像系社と併せて上位を占める。分布を見ると広島県と栃木県以外では北部九州の三県が多く、やはり信仰の発信地がこのあたりにあったことを思わせる。北部九州では福岡県や長崎県が旧三国にまたがるなどで県別の解析では不十分であり、別報により詳しく分布を検討したい。

表5 純宗像系と推定される全国の神社

	社名 ムナカタ	その他	その他の社名	計	厳島系 純宗像	純宗像 計
北海道	0	3	網走、奥津、留萌	3	15	18
青森県	8	4	善知鳥(うとう)、蕪島、四所、三島	12	4	16
岩手県	0	4	有家、市姫、三貴島、堤島	4	5	9
宮城県	0	3	石、一景島、清川	3	3	6
秋田県	0	3	八幡2、森嶽	3	2	5
山形県	0	5	奥津島、新山2、瀧姫、床浦	5	19	24
福島県	4	3	隅津島2、根渡	7	19	26
茨城県	1	5	一本、齋、三瓶、姫、水	6	20	26
栃木県	2	22	愛宕、綱戸、岩原、塩山、四社、白石、瀧尾9、淹尾2、露垂根、野上岩嶽、蓬萊、御榊山、三島	24	16	40
群馬県	2	4	瀧宮、淹宮、鳥總、日光	6	8	14
埼玉県	2	6	通殿、姫宮、前川、身形2、若宮	8	10	18
千葉県	13	4	春日、高津比咩、姫宮大神2	17	32	49
東京都	0	3	利田(かがた)、貴志嶋、姫宮	3	10	13
神奈川県	0	3	江島、大沼、杉山	3	12	15
新潟県	2	9	風島、樹崎、多岐4、瀧、都野、寺田	11	8	19
富山県	0	4	市姫2、市比賣、比賣	4	0	4
石川県	0	7	市姫、印鑰、意富志麻、奥津比咩、唐島、淹津、姫淹	7	3	10
福井県	2	6	市姫2、齋、多伎都姫、福島、龍宮	8	2	10
山梨県	0	3	山上、八王子**、姫宮	3	1	4
長野県	0	5	相川、桐原牧、下水澤、伏谷社、山田	5	6	11
岐阜県	0	1	大代	1	9	10
静岡県	4	8	琴倉、琴海、鷺島、礫石(つぶていし)、八王子**2、八面、若磯	12	12	24
愛知県	3	12	雨、澳津社、奥津、ぎ稿社、閑川社、豊島、馬場瀬、姫宮、深島、船塚社、藤嶋、山	15	23	38
三重県	0	0		0	1	1
滋賀県	0	6	石占井(いしらい)、奥津嶋、津久夫須麻、藤切、湯島、若宮	6	2	8
京都府	1	11	池姫、上ノ宮、岩尾、桑田、志高、七谷、白雲、住吉、多喜記、繁昌、三嶋	12	11	23
大阪府	0	0		0	2	2
兵庫県	0	16	一宮、三宮、四宮、池大、石部、磯崎、磯部、勝尾、岸河、佐用都比売、須浜、高井、姫宮、蛇穴、満田、焼尾	16	36	52
奈良県	3	7	天安川2、池、遠瀬、草川、国津、船倉	10	31	41
和歌山県	0	5	王子、大原、重山、志磨、姫	5	4	9
鳥取県	1	2	生石子(ういしご)、上船岡	3	1	4
島根県	0	6	市木、亀島、垂水、鳴瀧、別所、三屋	6	9	15
岡山県	4	12	阿智、大瀧、大佐、三社女駄、綱掛石、八幡、明神、明鉢3、湯舟、和忠	16	10	26
広島県	2	23	岡崎、大迫、大瀧、海山、亀尾山、衣羽、貴船、国光、嵯峨、鷺森、新堂平、宗造、糺津、築山、西脇、長尾、広瀬、美加登、宮ヶ瀬、宮畠、明神社2、湯舟	25	50	75
山口県	0	14	赤崎2、天浦、浮島、亀島、狩尾、木原、葛原、国津姫、三、新宮、装束、端島、横浜	14	19	33
徳島県	0	2	三所、八幡	2	4	6
香川県	0	5	久保、三所2、三条、新川	5	3	8
愛媛県	2	11	一の宮、瀛津、倉之町、桑名、高智(こうち)、三社、中巖前(なかごぜ)、日招八幡、姫坂、湊、明見	13	19	32
高知県	1	3	島宮、戸島、八幡宮	4	24	28
福岡県	4	17	岩津、景石(けいし)、三所2、十二社、背振、神興、津加計志、福、福足、福成、宮地嶽4、六嶽、横山	21	36	57
佐賀県	0	24	乙護、乙宮、黒髪、昨礼、背振、田島10、田嶋、多島、天山2、仲宮、日時麗岳、寶満、三島	24	23	47
長崎県	7	13	赤島、巖立、大島、笠松天神、柏、白浜、田嶋、奈伊島、長島、原島、淵、若宮、和多都美	20	8	28
熊本県	1	3	温泉、平原、舟底	4	11	15
大分県	0	6	市姫、小嶽(おたけ)大年社、三女、大明神、高家(たけい)、二宮八幡	6	12	18
宮崎県	0	0		0	4	4
鹿児島県	0	6	楠田、瀧之、姫宮、弊串、宮崎、山宮	6	4	10
沖縄県	0	0		0	0	0
計	69	319		388	563	951

3. 6 古代の記録にある宗像系神社

古代の記録とは一般に、①延喜式内社 ②国史見在社^(注12) ③国内神名帳記載社^(注13) であるが、そのほかに各国の風土記やその逸文に宗像神が見える例がある。ここでは①・②について検討する。

宗像系式内社と国史見在社については『宗像神社史』に詳述されているが、その後完結した『式内社調査報告』[10]などの調査研究があるので、それらを参考にまとめたのが、表6である。現在その地（旧郡）に存在する神社で、神名帳との対応がかなり確実で異論が殆どない神社は、「比定社」と呼ばれる。いくつかの候補があって統一見解のない場合は、その候補を「論社」という。延喜式神名帳は社名と祭神の数（座）を示すだけなので、表中に太字で示したムナカタの名のある神社以外は、現在の比定社または論社に祭られている祭神から宗像神を祭る神社と判定して表示した。神の座数を示していない神社は全て1座であって、現在複数神が祭られている場合それがどの祭神に当たるかはわからぬ。

この表を見ると、現在の宗像神の分布と同様、宗像神を祭る神社は古代すでに全国に広く分布していたことがわかる。北は福島県から南は鹿児島県に到るまでの25の府県の、平安時代以前に遡る56の古社に、宗像神が祭られている。このうち、ムナカタの名があるのは、11社である。このほかに、隠津島^{おきつしま}（オイツシマの訓もある）・奥津島^{おくつしま}（同上）・奥津比咩^{おくつひめ}・辺津比咩^{へつひめ}・恩津島^{おきつしま}・伊都岐嶋^{いつきしま}（現在の巖島神社に比定）の各社は、社名から見て宗像神を祭っていたと考えてほぼ間違いないと思われる（表1・2参照）、これを含めると17社となる。

この中には、宇佐神宮・松尾大社・巖島神社などの古来著名な神社が含まれる。現在は出雲大社の摂社であるが、瑞垣内で大社本殿に並ぶ筑紫神社が、タゴリのみを祭るのが注目される。またヤマト王権の勢力がやっと及んだばかりの福島県に、隠津島神社が記されていたことも見逃せない。

ムナカタを名乗る豪族の首長がこの時期以前から大和に根拠を持っていたことは確実である。大和の櫻井市外山^{とび}の宗像神社は、天武天皇の最年長の皇子で壬申の乱で活躍した高市皇子^{たけちのみこ}が修理させたという記録が残る。同皇子が胸形君徳善の娘尼^{あまこのいらづめ}子娘^娘を母とすることはいうまでもない。

表6-1 宗像神を祭る延喜式内社と国史見在社(1)

	式の社名と格	比定社(論社)社名	所在地	現在の祭神	備考
福島県	隅津島(おいつしま) 神社*	隅津島(おきつしま) 神社	二本松市木幡(旧東和町) 郡山市福良町	三女神(『調』にタギツイチキシマ) 三女神(明細帳にイチキシマ)	3論社の1。もと三宮あり 同上
	二荒山神社(名神大)	二荒山(ふたあらさん)神社	日光市山内	オオナムチ、タゴリ、アジスキタカヒコネ	2論社の1。天平神護二(766)開基と伝える
栃木県	胷形神社	胸形神社	小山市寒川	タゴリ	河岸に利根川の上陸地点。周辺に寒川古墳群
	川合神社	川合神社	胎内市(旧黒川村)	(主)多奇波世神、熊野加夫呂岐嶋御食野命、タギツ	立地からは水神? 2論社の1
新潟県	多伎神社	多岐神社	村上市岩ヶ崎	タギツ	4論社の1。傍らに滝
			村上市小川(旧朝日村)	(主)タギツ	同上
	都野(つの)神社	都野(との)神社	長岡市与板町	三女神、他にオオヤマクイなど	2論社の1
富山県	比売(ひめ)神社	比売(ひめ)神社	砺波市柳瀬	イチキシマ	雄神社(セオリツ)と関係?
			砺波市中条	イチキシマ	
			小矢部市宮中	タゴリ、アマテラス、イザナギ	
石川県	多伎奈弥神社	滝浪神社	小松市大野町	タゴリ、アマテラス	3論社の1。傍らに滝
	奥津比咩(おくひめ) 神社*	奥津比咩(おきつひめ) 神社*	輪島市海士町舳倉(へくら)島	タゴリ	舳倉島は元沖の島と。江戸時代弁才天とも
	辺津比咩(へつひめ) 神社*	辺津比咩(へつひめ) 神社	鳳珠郡穴水町	三女神(他に合祀神あり)	2論社の1。位置は輪島の重蔵神社の可能性も
	鳳至比古(ふけしひこ)神社	櫻原(いちきはら)北代比古神社	輪島市深見町	アマテラス、応神天皇など11神 中にタギツ	4論社の1
岐阜県	養基神社	養基(やぎ)神社	揖斐郡池田町	養基大神(イチキシマ?)	治水の神
愛知県	藤嶋神社	藤島神社	あま市七宝町	イチキシマ	白鳳四(676)。海人族が祀る。藤島はもと海中の島
	宗形神社	宗形神社	稻沢市国府宮	タゴリ	現在尾張大國靈神社の摂社
滋賀県	山田神社	山田神社	彦根市宮田町	サルタヒコ、ホムダワケ(応神天皇)、三女神	六代孝安天皇時代
	岡本神社	五社神社	長浜市早崎町(旧びわ町)	アマテラス、スサノオ、三女神	4論社の1
	奥津嶋(おいつしま) 神社(名神大)*	大島奥津嶋神社	近江八幡市北津田町	奥津嶋: 奥津嶋姫(タゴリ?)、大島: 大國主命	奥津嶋はもと琵琶湖中の島。大島神社も式内社
京都府	松尾神社(二座並 名神大)*	松尾大社	京都市西京区嵐山宮町	大山咋(オオヤマクイ)、中津島姫命(イチキシマ)	秦氏が筑紫胸形中都大神を祀る。社殿は大宝元(701)
	(国)宗像神社	宗像神社	京都市西京区嵐山中尾下町	奥津嶋姫(タゴリ?)	現在は松尾神社の摂社
	櫻谷(いちひたに)神 社*	櫻谷(いちひたに)神社		イチキシマ	同上
	鴨岡太(おかもと)神 社	上賀茂神社末社山森神社	京都市北区上賀茂本山	スサノオ、櫛稻田(クシイナダ)姫、タゴリ	4論社の1
		嚴島神社	京都市左京区静市市原町	イチキシマ	同上
	(国)宗像神社	宗像神社	京都市上京区京都御所御苑内	三女神	藤原冬嗣が795勧請と。それ以前から存在?
	日向(ひむかい)神 社	日向大神宮	京都市山科区日ノ岡東谷町	アマテラス、三女神	疑問視もあり
	(国)恩津島(おきつしま) 神社	老人島(おいとしま)神社	舞鶴市西大浦冠島	天火明(アマノホアカリ)命、イチキシマ	元慶四(880)昇叙。イチキシマ以外の言い伝えも
大阪府	和伎坐天乃夫支壳 神社(大)	和伎坐天乃夫支壳 (わきにますあめのふきめ)神社	木津川市山城町	天乃夫支壳命、三女神	天平神護二(766)伊勢より。三女神も伊勢から飛来と伝える
	桑田神社	桑田神社	龜岡市篠町	イチキシマ、オオヤマクイ、オオヤマツミ	由緒にイチキシマを主とする。湖を干拓
大阪府	加支多(かきた)神 社	加支多(かいた)神 社	泉佐野市鶴原	イチキシマ、ホムダワケ、天児屋根(アメノコヤネ)命	元は市杵島神社でイチキシマを祀る
	意支部(おきへ)神社	長田神社	東大阪市長田	ホムダワケ、神功皇后、タゴリ(中)	2論社の1。百濟帰化人長田使主の祖神?

*『宗像神社史』の認定

(国)は国史見在社、(准国)は六国史以外に古代の記録があるもの

表6-2 宗像神を祭る延喜式内社と国史見在社(2)

	式の社名と格	比定社(論社)社名	所在地	現在の祭神	備考
兵庫県	佐用都姫神社	佐用都姫(さよつけめ)神社	佐用郡佐用町	狭依姫=イチキシマ(風土記には伊和大神の妃佐用都姫と)	干拓・水の神。弥生遺跡あり
	石部神社	石部(いそべ)神社	加西市上野町	三女神	養老三(719)厳島よりと。旧地名は上鴨(加西=西加茂)
	岸河神社	岸川神社	洲本市上内膳	三女神	河畔にあり
奈良県	高天彦神社(名神大)	高天彦(たかまひこ)神社	御所市北漣	タカミムスピ、イチキシマ、菅原道真	「高天原」の地と伝える
	高鴨阿治須岐託彦根命神社(四座並名神大)	高鴨神社	御所市鴨神	アジスキタカヒコネ、下照比賣、天稚彦、攝社にタゴリ	現在タギリは境内摂社の祭神であるが、四座のうちとされる
	宗像神社(三座並名神大)	宗像神社	桜井市外山(とび)	三女神	天武以前
和歌山県	志磨神社(名神大)	志磨神社	和歌山市中之島	中津島姫命(イチキシマ)	紀ノ川の中州にある。大同元(806)以前に存在
鳥取県	手見神社	手見(てみ)神社	鳥取市国府町	オオヤマクイ、イチキシマ	大同年間(806-810)勧請と伝える
	美歎(みた)神社	美歎(みたに)神社	同上	タケツヌシ、タケミカヅチ、イチキシマ	香取・鹿島の神を勧請と伝える。もと水神でイチキシマか
	曾形神社	宗形神社	米子市宗像	三女神	背後に宗像古墳群
島根県	布弁神社	布弁(ふべ)神社	安来市広瀬町	オオヤマクイ、イチキシマ	出雲国風土記にあり
	杵築神社(名神大) 同社神魂(かむたま)の御子神社	出雲大社境内摂社 神魂(かみむすび)御子神社(筑紫社)	出雲市大社町杵築東	タゴリ	出雲大社の第一摂社。出雲国風土記では杵築大社とは別社
	御崎神社	日御崎(ひのみさき)神社	出雲市大社町日御崎	アマテラス、スサノオ(配)三女神 五男神、境内宗像神社にタゴリ	出雲国風土記にあり。三代安寧天皇の時スサノオを祀る
岡山県	宗形神社	宗形神社	赤磐市是里	三女神	十代崇神天皇の御代勧請と。
	宗形神社	宗形神社	岡山市大窪	三女神	吉備氏が筑紫より勧請。背後に4C後半の古墳
広島県	伊都伎(いつき)嶋神社(名神大)	嚴島神社	廿日市市宮島町	三女神(イチキシマが主祭神といわれる)	推古天皇元(593)勅許を得て三神を祭る宮殿創立と伝える
山口県	(準國) 長門宗形神 (寛平三年-891-昇叙の記録あり)	宮尾八幡宮に合祀の旧宗像神社	もと宇部市東万倉	三女神	宗像神社は天平宝字八(764)勧請と伝える
		生野神社に合祀の旧宗像神社	もと下関市武久	三女神(もとタゴリ)	弥生時代の武久浜遺跡の場所にあった
香川県	大水上神社	大水上神社	三豊市高瀬町	オオヤマツミ、ホムダワケ、宗像大神	水神。讃岐二宮。空海が参籠したという
愛媛県	姫坂神社(名神大)	姫坂神社	今治市日吉	イチキシマ	もとは河岸にあった。雨乞いの社
	多伎神社(名神大)	多岐(たき)神社	今治市古谷(旧越智郡朝倉村)	タギツ、スサノオ、多伎都彦	多岐川の扇状地上。タギツが主祭神か
福岡県	宗像神社(三座並名神大)	宗像大社(三坐並明神大)	宗像市田島	三女神	
	織幡神社(名神大)	織幡神社	宗像市鍾崎	武内大臣、志賀大神、住吉大神、天照大神、宗像大神、八幡大神、壹岐真根子	
佐賀県	田島坐(たしまにます)神社(名神大)*	田島神社	唐津市呼子町加部島	三女神	天平三(731)稚武王を配祠と伝える。
長崎県	和多都美(わたつみ)神社(名神大)	海神神社	対馬市峰町木坂	豊玉姫、(配)ヒコホホデミ、宗像神、道主貴神、ウガヤフキアエズ	ワタツミ4社の1(いざれも論社)。ワタツミ・住吉・宗像未分化時代の社か
	(国)宗像天神	宗像神社	平戸市田平町	三女神	貞觀一三(871)授位
大分県	比賣神社(名神大)	宇佐神宮	宇佐市南宇佐龜山	三女神	八幡大菩薩宇佐宮神社・大帶姫廟神社(いざれも名神大)と並んで同所に祭られている
鹿児島県	加紫久利神社	加紫久利(かしくり)神社	出水市鯖渕	アマテラス、(配)タギリ、住吉三神、ホムダワケ、神功皇后	

*『宗像神社史』の認定

(国)は国史見在社、(准国)は六国史以外に古代の記録があるもの

3. 7 古代における宗像神の位置と現在との比較

延喜式神名帳には、現在社名最多の八幡社は全国でまだ豊前・筑前の2社が見えるのみで、熊野系は5社、日吉神・稻荷神・春日神・諏訪神などはまだ元社以外見えない。天満社・神明社・白山社などはまだ全く現れていない。この時期に北は陸奥にまで式内社があった宗像神は、式内社以外にも全国にかなり高い密度で普及していたことが推定できる。たとえばほぼ完全な形で残っている天慶七年(944)成立の『筑後国内神名帳』には、筑後7郡のうち御原・御井・三瀬・上妻・山門の5郡に宗形の名を冠した神社が計8社見える[11]。ところが『平成データ』には、ムナカタの名を冠する神社は筑後地方に全く登録されていない。しかし宗像神を祭る神社は二〇社あり、うち八社が厳島神社である。上記神名帳には厳島の名はないので、宗形社の多くが後に厳島神社に名を変えたのではないか。これは『安芸国内神名帳』で、後年の厳島神社に相当すると考えられる安芸郡の二社が宗方という名で出ていることからも推察できる。このように、神社名は後世の流行神によって変えられやすいこと、それにもかかわらずかなりの比率で祭神が生き残っていることがわかる。

延喜式神名帳から、社名が同一であるか、同一と判断される社の数を集計し、10社以上ある社名の系統を表7に挙げた。ムナカタ系社では、表6中の国史見在社等は除いている。ムナカタ系社は、上位の8系統の中に入っている。参考までに、同一系統の社名が『平成データ』にどの程度存在するかをも示した。この社数は、現在社数の多い系統に比べると少ないものが多い。

表8の左欄に、現在の系統別社数を多い順に示した。このデータは、『平成データ』を用いて國學院大學がまとめたものである[12]。上位を占めるのは、平安時代後期以降の流行神を祭る社が殆どである。表7の古代の系統社のうちでは、賀茂信仰に対応する鴨社が辛うじて26位に入っているだけで、他は『平成データ』の社名の上位には入っていない。上位15位以内に、ムナカタの7社を上回る数の式内社がある神社名はない。

表8の右欄に、『平成データ』を用い代表的な神々について、祭神名で検索して名寄せした結果を対比して示す。この上位7位までは、左欄の上位の社名とかなりよく対応していることがわかる。すなわち現在の神社の社名の多くは、中世以降の流行神に基づいていることがわかる。

表7 延喜式内社の主な社名系統(10社以上)

番号	系統	社数	平成社数
①	鴨	19	44
②	兵主	18	32
③	ミワ系(大神・美和・三輪)	15	108
④	物部系	14	14
⑤	丹生	14	102
⑥	宗像系(奥津島など含む)	13	69
⑦	海(わたつみ)系	13	234
⑧	石部(いそべ)社	13	30
⑨	オオナムチ系(大穴持・大名持)	12	12
⑩	倭文(しどり)	11	15
⑪	大国魂	10	125

表8 神祇信仰分布の社名からの調査と祭神からの調査との対比

順位	社名で検索	社数	平成社名との対応	祭神で検索	主な表記例	祭る社数	式内社名との対応
①	八幡信仰	7817	①	八幡神	応神天皇・菅田別・大綱和氣	13488	
②	伊勢信仰	4425	②	アマテラス	天照大神・天照皇大神・大日靈貴	11315	
③	天神信仰	3953	⑤⑦	スサノオ	素戔鳴・須佐之男	9211	
④	稻荷信仰	2970	④	穀靈神(豊受除く)	倉稻魂・宇迦之御魂・保食	9046	
⑤	熊野信仰	2697	③	菅原神	菅原(道真)・天滿天神	7708	
⑥	諏訪信仰	2616	⑤	イザナギ・イザナミ神	伊弉諾・伊弉冉	7298	
⑦	祇園信仰	2299	⑩⑯	オオヤマツミ	大山祇・大山津見	7066	
⑧	白山信仰	1893		オオナムチ・大国主	大己貴・大国主	6183	②③⑨
⑨	日吉信仰	1724		愛宕・秋葉神	火產靈・迦具土	3811	
⑩	山神信仰	1571		タケミカタ	建御名方・武御名方	3734	⑥
⑪	春日信仰	1072	(①⑯)	宗像神*	表1に示す	3532	
⑫	愛宕信仰	872		春日神	天兒屋根・斎主(春日系)	2652	
⑬	三島・大山祇信仰	704		比叡神	大山咋・日吉	2399	
⑭	鹿島信仰	604		白山神	菊理姫・白山比咩	2447	
⑮	金比羅信仰	601		スクナビコナ	少彦名・少名彦・少名毘古那	2446	
⑯	住吉信仰	591		豊受神	豊受姫・豊受大神	2158	
⑰	大歳信仰	548		事代主	事代主	2121	
⑱	嚴島信仰	530		ミズハノメ	罔象・水波女	1953	
⑲	貴船信仰	463		紀伊熊野神	事解男・速玉男・家都御子・夫須美	1940	
⑳	香取信仰	420		コノハナサクヤヒメ	木花咲耶姫	1847	
㉑	えびす信仰	408	(⑯)	大物主	大物主	1778	
㉒	浅間信仰	397		住吉神	表筒男・中筒男・底筒男	1694	②③
㉓	秋葉信仰	362		ヤマトタケル	日本武・倭武	1572	
㉔	荒神信仰	317		タケミカヅチ	武甕槌・武御雷	1465	
㉕	水神信仰	277		志賀系海神	綿津見・少童・豊玉姫	1375	
㉖	賀茂信仰	277		オカミ神	靃・淤加美	1327	⑦
備考	岡田莊司ほか『現代・神社の信仰分布』による						
参考	神功皇后(八幡神と殆ど重複)						
	イチキシマヒメ*(宗像神に含まれる)						
	タゴリヒメ*(同上)						
	タギツヒメ*(同上)						
	武内宿弥(八幡神と殆ど重複)						
	フツ・フル以外の物部神						
	丹神						
	大国魂						
	天羽槌						
	天香語山・高倉下・宇麻志麻治						
* ハ王子神を含む 太字は延喜式に10社以上現れる系統社に対応する祭神							

表7で上位にある宗像神は、中世以降の流行神を除くと、オオナムチ・大国主に次ぐ数の神社に祭られている。左欄の八幡信仰社と厳島系神社にも祭られているが、前者は573社、後者は571社でそれぞれその一部に止まる。宗像神の多くが、古代以前から祭られていたことが示唆される。ところが6000社以上で祭られている代表的出雲神のオオナムチ・大国主に対応する社名は、左の表には全く出ていない。しかし表7の②③⑨番の社名の神社の現在の祭神を見ると、その多くにオオナムチ・大国主が祭られている。神話の時代にヤマト勢力に屈服した出雲勢力であるが、古代にはその神を祭る神社がまだ有力であったのである。

以上から、全国の神社には古代以前から祭られてきた祭神がかなりの比率で残っていること、そしてその解析により古代以前の信仰の姿が浮かび上がってくることがわかる。有名社の由緒の研究や、現存神社の社名分布などからは、このことは見てこないのである。

3.8 顕著な宗像神分布域についての考察

①津軽のムナカタ神社

『平成データ』には、青森県に「胸肩神社」という最も古い名前一つを持つ神社が7社も登録されている。これらはいずれも旧北津軽郡・西津軽郡・南津軽郡にある。これ以外に、『深浦町史上』（昭和52年刊）には、同町（西津軽郡）に2社の胸肩神社が記されている。『宗像神社史』と『調』には

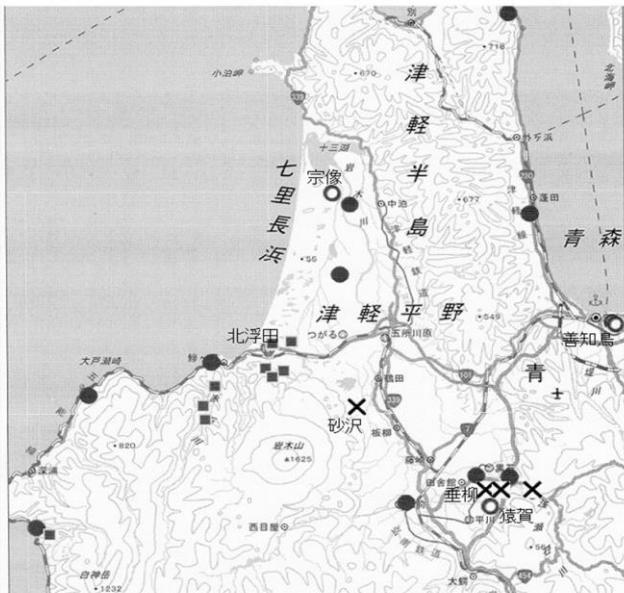


図4 津軽のムナカタ神社と弥生の水田（地理院地図により作製）

- 胸肩神社 ○その他宗像系神社
- 高倉神社 × 弥生の水田

このほかに東津軽郡の2社が記録されている^(注14)。また『青森県の地名』[13]は、南津軽郡の田舎館村に胸肩神社を記している（この社は現存が確認された）。以上を合わせると、少なくとも昭和期には、12社もの胸肩神社と1社の宗像神社が津軽に存在したことになる。これらの分布を、図4に示す。なぜ津軽に、胸肩のような古社名が数多く残ったのだろうか。

江戸期の資料を見ると、これらの神社の多くは、かつて弁天と呼ばれていた。
あじがさわしかし弘前市品川町と西津軽郡鰺ヶ沢町浜町の二社の胸肩神社が、いずれも宝

暦九年（1759）の神社書上帳に胸肩社と書かれ、安政二年（1855）の神社書上帳にも胸肩宮と書かれているのである（他の時期の記録には弁財天堂と書かれている）[14]。この記録が残っていたので、明治の神仏分離の時に胸肩神社と名乗ったことがわかる。もちろん胸肩の名は弁才天より古いので、この名が残っていたことは、中世以前にこれらの社が胸肩の名を持っていたことを示すものである。

弘前市の胸肩神社は、津軽藩のお膝元弘前にある津軽の代表的な古社の一つである（写真1）。鰺ヶ沢町は西海岸最大の町で、津軽平野の入口に当たる港町である。浜町の胸肩神社は港の入口にあり、いかにも海神の神社らしい（写真2）。津軽の他の多くの弁才天社は、由緒の古いこの二社に倣って、ほとんどが明治期に胸肩神社と改名したものと思われる。



写真1 弘前市品川町の胸肩神社



写真2 鰺ヶ沢町浜町の胸肩神社

胸肩神社にならなかった宗像系神社もある。青森県には戦前までの県社が二社あるが、そのいずれもが宗像神を祭っている。青森市の県庁のすぐそばの善知鳥神社は、かつて外ヶ浜と呼ばれた青森市発祥の地にある（写真3）。版画家の棟方志功はその氏子の家に生まれ、宗像族であることを誇りにしていた。

この神社の祭神が宗像三女神である。江戸時代の文筆家菅江真澄が天明八年（1788）の日記「そとはまづたい」に、「うとうのみやしろ」を「棟方明神」と記し、宗像の神を祭ると書いている[15]。安政二年の神社書上帳にも善知鳥宗像宮とあるので、純宗像系神社であることは間違いない。



写真3 青森市安方の善知鳥神社

もう一つの旧県社は、弥生時代中期の水田遺跡
たれやなぎ 垂柳 遺跡の近くにある猿家神社である。この神
さるか
社の主祭神は仁徳天皇の時代にこの地方を平定し
ようとして敗れた將軍というが、このような伝説
は東北地方に多く、後世の付会と思われる。この
神社は鏡ヶ池という大きな溜め池に接しているが、
この池の真ん中にイチキシマを祭る摂社の胸肩神
社がある。もともと水田地帯の灌漑用溜池に宗像

神を水神として祭ったのが起源ではないかと思われる。垂柳の「弥生の水田」も当然その恩恵を受けたであろう。その垂柳地区がある田舎館村にも、上記の胸肩神社がある。



写真4 秋田市河辺松渕の胸形神社

垂柳よりさらに古い前期の「弥生の水田」の跡が、より日本海に近い岩木山北麓の砂沢で発見されている。ここは宗像神の分布するルート上にある。宗像神も日本海沿岸から津軽に入ったと思われる。垂柳遺跡では、遠賀川系^(注15)の壺などが出土している。遠賀川系土器は、弥生時代前期のうちに秋田市の地蔵田遺跡まで到達している。この近くには前出の胸形神社が祭られている(写真4)。ムナカタ神社は、「弥生の水田」および遠賀川系土器とともに、日本海沿岸を北上して津軽に入ったように見える。遠賀川式→遠賀川系土器は、弥生時代のかなり早い時期に水田稲作と共に日本海沿岸に沿って北上するが、表6で見るよう宗像系式内社も米子市、舞鶴市、小松市、能登半島の各社、富山県、新潟県と日本海の海の道に沿っている。

最近、遠賀川式土器の誕生地が旧宗像郡内であったらしいという研究が発表されている [16]。遠賀川式→遠賀川系土器の北上が、宗像神の北上と対応していることを支持する知見である。

ところで津軽に来た九州系氏族は、宗像族だけではないらしい。図4中に示すように、鰯ヶ沢町を中心、胸肩神社の分布域内に9社もの高倉神社が分布する。高倉の名を持つ神社は、中世の高倉天皇または以仁王を祭る神社を除けば、全国で29社しかない。このように集中するのはきわめて異例である。

古代以前に起源がある高倉神社の祭神は、本来高倉下命(以下タカクラジ)である。この神は、記紀に神武東征の時に熊野で神武一行を救ったとされるので、熊野地方の4社などで祭られている。この神は、『先代舊事本紀』[17](以下『旧事紀』)に饒速日命(以下ニギハヤヒ)の大和入植以前の子の天香語山命の別名とされている。この神が、鰯ヶ沢町北浮田町の高倉神社に祭られているのである(写真5)。ここには他の8社と同様に、高皇產靈命(以下タカミムスビ)も祭られている。この神は、延喜式の宮中八神の高御產日神と同一神で、皇室ゆかりの神である。津軽の高倉9社は、江戸期の資料では飛竜宮などと書かれ、高倉の名は見えない。おそらく何らかの伝承があって、神仏分離の際この社名になったと思われる。祭神のタカミムスビは、おそらくその際の役人が社名からの類推で指導したものであろう。ただし全国の高倉神社で、タカミムスビを祭神にする例はない。ここにポピュラーではないタカクラジの名が一社とはいえ見られることは、何らかのいにしえの記録があつて考へる他はない。もしそうであれば、他の社もかつてタカクラジを祭っていた可能性がある。

この高倉神社の古社が、宗像市の隣の遠賀郡岡垣町にある。その祭る神は大倉主命と菟夫羅媛命という珍しい神で^(注16)、『日本書紀』仲哀紀に仲哀天皇らが遠賀川河口の港に入るときに出てくる。この大倉主命は、タカクラジと同一神と考える人が多い。それはタカクラジとは高倉主がなまつて呼ばれたものと考えられるし、タカもオオも美称に過ぎないからである。以上のことから、北部九州の物部系の人々が、宗像神を祭る人々と同様、古代以前に津輕に入った可能性が考えられる。



写真5 鯉ヶ沢町北浮田町の高倉神社

②栃木県の田心信仰

栃木県でタゴリを祭る66社はすべて神名を田心と表記し、『古事記』風の表記は全くない。これはこの信仰が、古くかつ強固であることを示唆する。タゴリのみを祭る神社61社のうち社名がもっとも多いのは滝尾（瀧尾）神社（タキオまたはタキノオと読む）の14社（うち1社は日光滝尾神社）で、うち10社は田心のみを祭り、他神がない。1社はイチキシマを配祠し、3社は他に大己貴命（以下オオナムチ）と味耜高彦根命（『古事記』に阿治志貴高日子根、以下アジスキ）を祭るが、いずれも筆頭神が田心である。日光神社が8社あるが、これはいずれも田心、オオナムチ、アジスキの三神を祭る。二荒（山）神社の7社のうち6社もこの三神を祭るが、1社は田心とオオナムチである^(注17)。

ふたらさん
この三神は、日光二荒山神社の現在の祭神である。瀧尾神社はその別宮で、日光二荒山神社のある谷の上流約1kmの白糸滝の上にある（写真6）。現在は本社と同様この三神を祭るが、『調』には田心のみが記されており、かつては中禅寺湖畔の中宮祠と同様田心のみを祭っていたと考えられる。上記14社の滝尾（瀧尾）神社のほとんどが田心のみを祭るのは、この別宮からの分祠であることを示唆する。日光の語源となった二荒（山）神社の多くは日光二荒山神社に合わせて上記三神を祭るが、このほかに田心を祭らない二荒（山）神社が七社ある。そのうち6社はオオナムチを主神としており、二荒山神社本社の祭神が本来オオナムチであったことを示す。滝（瀧）尾神社はこれと独立に白糸の滝の上に祭られ、はじめこの名で普及していたのが、その下流の二荒山神社（現在の日光二荒山神社よりも下流にあった）と一体化され、アジスキが加わって日光三山（男体山・女峰山・太郎山）に対応する三神を祭る神社となってさらに普及したのであろう。



表8で見たようにオオナムチは全国で6千社以上が祭る出雲系の主神であるが、栃木県には最多の334社で祭られている。このように強い出雲神信仰に伴って、田心が祭られるようになったと思われる。

アシスキは、『古事記』に大国主命とタゴリとの間の子とし、出雲本宗家の系譜を載せる『旧事紀』にもオオナムチとタゴリの子とする。記紀神話にもこの神の挿話がかなり詳しく書かれており、天平五年(733)撰上の『出雲国風土記』 [18]に5箇所も出てくるので、古代出雲の重要な神であったことは間違いない^(注18)。アシスキは全表記を合わせても全国で225社が祭るのみで、なかでは栃木県が46社と飛び抜けて多い。これも栃木県が、出雲信仰の中心地の一つであったことを示す。このように、宗像神、とくにタゴリについては、その信仰伝播の検討には出雲神との関係が考慮されなければならない。



写真7 小山市寒川の胸形神社

なお栃木県には2社の胸形神社があり、その1社小山市寒川の式内社（写真7）は三女神を祭るが、鹿沼市の社は田心だけを祭り、配祠神の中にも田心がある。田心信仰が滝尾（瀧尾）系社のみに限られていないことを示す。

図5 栃木県のタゴリを祭る
主な神社の分布

- タゴリー神を祭る滝尾神社
 - 他神も併祭する滝尾神社
 - ×日光二荒山別宮の滝尾神社
 - タゴリー神を祭る胸形神社
 - 三女神を祭る胸形神社
 - ▲タゴリー神を祭る他の神社

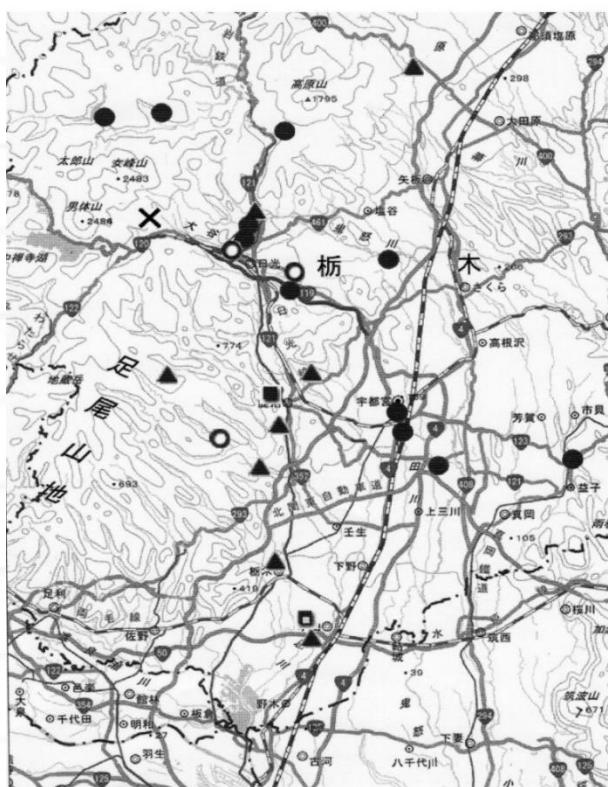


図5に、これら神社の県内の分布を示した。ここは、思川の流域である。思川は、はじめ上記小山市の胸形神社の主祭神から田心川と呼ばれていたのが、田心の二字が結合して思川になったと言われている（Wikipediaなどによる）。

思川は、足尾山地の地蔵岳東麓を源流とし、東流して鹿沼市の南で平地に出てから壬生町、小山市の西を通り渡良瀬遊水池に入る。図に見るように、この流域にはタゴリを祭る神社が特に多い。タゴリ信仰は、おそらく利根川から栃木県に入り思川を遡ったと考えられる。そして日光市方面に向かい山内の滝の上に祭られた神社が、滝尾神社として拡がったのであろう。

西隣の群馬県でタゴリを祭る四社は、いずれも利根川流域にある。長野県の千曲川上流の佐久市に純宗像系の山田神社があり、上田市には「思姫」を合祀する八幡神社がある。「思姫」は全国で他にも三社が祭るが、栃木県日光市小林（旧今市市）の滝尾神社はオオナムチを併祭し、久留米市の天満神社と高知市春野町の八王子宮にはタギツヒイチキシマと共に合祀されていて、いずれも田心の誤記であることが明らかである。

千曲川流域には、弥生時代後期鉄剣など鉄器流入が顕著であることなどから考えても、タゴリーアジスキ信仰は千曲川を遡って毛野国（群馬・栃木）にもたらされた可能性が強いであろう。西隣の福島県にも式内の隱津島神社と、4社の宗像神社があり（江戸時代初期の会津藩の調査 [19]では、11社が記録されている）、宗像神が多い。しかし福島県では、宗像神の中でイチキシマが優勢である。栃木県にもイチキシマを祭る神社は多いが、上記1社を除いてタゴリとは共祭されないのが特徴である。栃木県のイチキシマ信仰は、あるいは別途福島県側から伝えられたかと思われる。

③印旛沼周辺の宗像神社群

千葉県の13社の宗像神社は、すべて旧印旛沼の北岸に沿って丘陵上に分布する（写真8はその1例）。印旛沼は、現在ではいくつかの小さい湖沼に分かれているが、かつては利根川に繋がる長大な河跡湖であった。図6に郷土史家の小倉博氏による分布概略図を示した[20]。この図に示すように、この宗像神社群と接して、19社の鳥見神社群（かつては21社）がある。またさらに、印旛沼を挟んで15社（かつては18社）の麻賀多神社がまとまって分布する。



写真8 印西市平賀の宗像神社

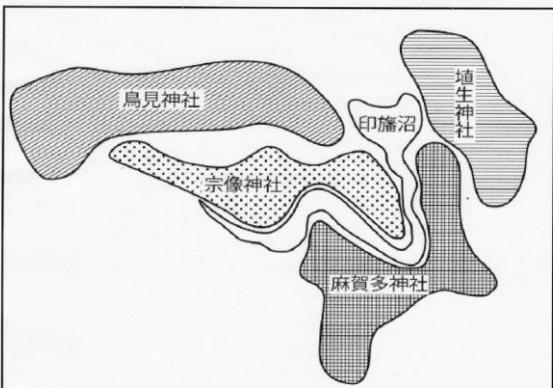


図6 印旛沼周辺の神社群の分布（小倉博による）

この分布が、宗像神を祭る氏族（以下宗像族とする）の役割を示していると思われる。小倉氏によると、麻賀多神社は全国でもここだけに分布する神社で、応神天皇の時代に印旛國造（いはやのみこと）といふ伊都許利命を祭る。すなわち地元のローカルな祖先神である。

一方鳥見神社群は、全て物部族の祖神（にぎはやひのみこと）饒速日命（以下ニギハヤヒ）を主神として祭っている（注19）。鳥見のある神社は全国でここだけであり、ニギハヤヒを祭る全国の135社のうちでもここが最も多い。この社名は現在殆どトリミと読まれるが、2社はトミと読む。地名もかつてはトミといったようである（注20）。

これらの組み合わせは、大和の櫻井市に見られる。大和の聖山三輪山の南に向かい合うのが鳥見山（とりみ）である。これはトミヤマと読まれるが、すぐその下に鳥見という字名があるので、トリミがトミとも呼ばれたことは間違いない。そしてこの一帯の大字は、外山である。この地名は、もちろんトミから来たものと思われる。この外山の鳥見山北麓に、前述の式内の宗像神社がある（写真9）。そして鳥見山（とみ）の西麓櫻井には、古社の等彌神社がある。この神社の祭神は現在大日靈貴命（天照大神の別名）を祭神としているが、本来の祭神がニギハヤヒとする説も根強い。外山に対して大和盆地の反対側の奈良市石木町に同じ発音の登彌神社があってニギハヤヒ他四神を本殿に祭るが、神社の由緒には本来の祭神をニギハヤヒとしている。神武紀にニギハヤヒが大和に入り土地の豪族長髓彦（『古事記』）に登美の那賀須泥毘古（おおひるめのむちのみこと）の妹三炊屋媛（みかしきやひめ）が娶って可美真手命（『古事記』）に宇摩志摩遅命（うましまじのみこと）を生んだとある。このようにトミがニギハヤヒと特別の縁のある地名であるので、等彌神社の祭神もニギハヤヒであった可能性が高い。これらから、上記印旛周辺の鳥見神社の社名と祭神の由来が理解できる。そして宗像神社の鳥見神社群とのつながりも、大和以来あることがわかる。

どうして物部系の氏族が宗像族と共にここに入植したのか。上記小倉氏などは、『続日本後記』承和2年（835）の記事に物部小事大連がかつて板東を征服して匝瑳郡（現在の匝瑳市）を立てることを許されたという由緒が載ることから、この子孫が印旛にも拡がったのではないかと推論している。しかし『旧事紀』の「国造本紀」によると、それ以前に印旛と下海上の国造が任命されていて、支配体制ははっきりしていた。小事連（系譜には大連とは書いていない。その兄が大連だったので、朝廷に一人しかいな



写真9 櫻井市外山の宗像神社

い大連に小事がなれるはずがない) が功績により下海上の最南部を割譲してもらったに過ぎないのである。匝瑳郡と印旛郡との間には下海上郡があり、直接接していない。そして匝瑳郡には現在物部系の神を祭る神社は存在しない。上記推論はおそらく当たらないであろう。

物部系を名乗る古代の氏族はきわめて多かった。京および畿内の古代日本の氏族を分類した『新撰姓氏録』(平安時代初期編纂)によると、「神別」(神代の神々の後裔)の404氏のうち、ニギハヤヒの末と名乗る物部系は107氏で、最多である。しかし前述のように、ニギハヤヒを祭る神社は少なく、畿内には16社しかない。大和にも物部系氏族7氏が記録されているが、ニギハヤヒを祭る神社は前記2社のみである。物部系氏族でも、おそらく本宗家に属する人々だけがニギハヤヒを祭っていたのではないか。これは本宗家の根拠地があった大阪府に、ニギハヤヒを祭る神社が11社集中することからもわかる。

その畿内の物部本宗家は、587年の「蘇我・物部戦争」で滅びた。本宗家ゆかりの人々はおそらく土地を取り上げられ、各地に四散したであろう。その人々が落ち着いた土地の一つが、印旛だったのではないか。

では宗像族はなぜ物部族の隣に住んだのか。宗像族と物部族との関係については別報で詳述する予定であるが、宗像の周囲の筑豊地方には物部系の神社が多い。前述のように、宗像市の東隣岡垣町の古社高倉神社は、物部神を祭る神社と考えられる。そのほかにも筑豊地方には物部神を祭る神社が多く、宗像市の南隣宮若市の天照神社とその他三社が、ニギハヤヒを祭る。『旧事紀』のニギハヤヒ東征説話に出てくる地名ゆかりの氏族名からも、物部族の故地が筑豊であったとする考えが強い。

以上のように、津軽でも、印旛でも、ムナカタと同様、物部系氏族が宗像族の近くに住むが、決して混住はないという現象が認められる。これが両者の関係を表しているのであろう。このことは、両者はおそらく出自がかなり異なり、相互の利益供与のため近接して住んでいることを示すと思われる。そして、居住地の状況を見ると、いずれも宗像族が先に到着し、その後物部系氏族が入植したように見られる。これをはっきり示しているのが、印旛の例である。図6の各神の配置から、麻賀多神を祭る地元の氏族の隣にまず宗像族が入植し、続いて物部系氏族が到着した状況が明らかである。

宗像族は、宗像神の広い全国分布が示すように、おそらく通商のために、日本全国に足跡を印し、各所に拠点を作っていた。しかしあくまでも縄文以来の海人としての性格上、武力による土地の占拠とは無縁であった。しかしその宗像族が、弥生文化の伝達を始め、各所に弥生集落が成立すると、土地占拠の争いが生ずるようになる。そうすると武力を持つ氏族の後ろ盾が必要になってくる。

印旛の場合宗像族が入植した理由は、その配置から見て、印旛沼の干拓であったと思われる。これは後世のことになるが、『宗像市史』[22]によると、『続日本紀』解工の宗像朝臣赤麻呂が褒賞を受けた記事が載るという。解工とは、土木工事の技術者と考えられている。正史に載るということは、その背後に大きな技術集団が居たことを意味しよう。印旛沼でも、麻賀多神を祭る地元の豪族が、干拓のた

めに宗像系の技術者を呼んだのではないか^(注21)。干拓には長い時間がかかるので、宗像族の人が定住することになったのであろう。

物部本宗家ゆかりの人々は、かつての両者の故地でのつながりから宗像族の住む土地を追って入植したのではないか。武力を持つ物部系の人々は、宗像族を護る役割も持っていたであろう。また宗像族は、武力を持つ両氏族の間で、緩衝の役割を持っていたとも考えられる。

以上三カ所の例から、宗像神の広い分布から推測される古代宗像族の広域活動には、有力な友好氏族、特に出雲族と物部族との関わりが強かったことがわかる。

④中国山地の宗像神

広島県は宗像神を祭る神社が最も多いが、どのようなところに分布しているのだろうか。

近年地方自治体の合併が進み、現在の住所からは神社分布の地理的特徴が見えにくくなっている。『平成データ』には、明治年間の神社明細帳に基づくと思われる所在地の郡名がデータに含まれているので、広島県の宗像神を祭る神社をその郡名でソートし、得られた郡別分布を図7に示した。各郡中に書き込んだ上段の数字は各郡の全神社数に対する宗像神を祭る神社の比率、下段の数字は表5の純宗像系社（宗像神社を含む）の数である。宗像神は、安芸の厳島神社のある海岸地帯ばかりではなく、内陸部にも多い。特に現在三次市の一部となっている旧三谿郡で、最も高い集中を示す。なぜこのような山奥に宗像神が多く祭られているのだろうか。

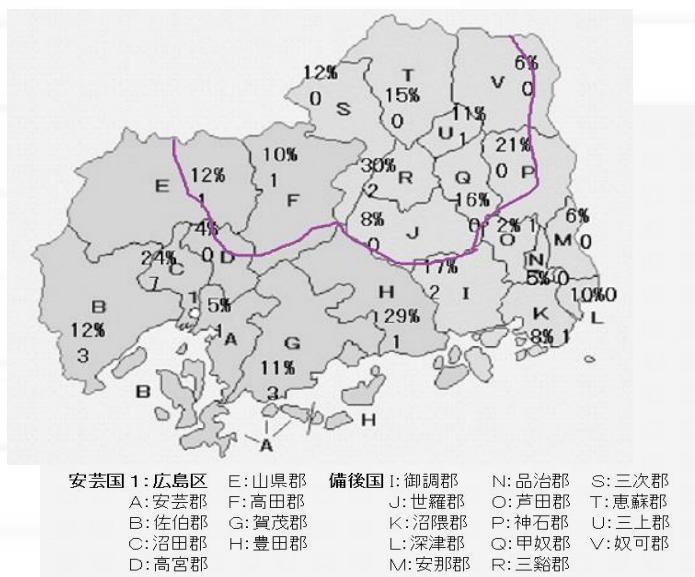


図7 広島県の旧郡別の宗像神を祭る神社の全神社に対する比率（%で表示）と純宗像系社数（宗像神社を含む）

図中の曲線内は江の川流域

（旧郡の図は石田 諭司 氏のホームページの図を利用）

<http://www.tt.rim.or.jp/~ishato/tiri/gun/map/1889/34hirosima.htm>

このあたりは、島根県江津市に河口を持つ江の川の流域である。図7中に示したように、江の川は広島県東部の山間部に広い流域を持ち、流域面積は広島県全体の面積の3分の1に近い。宗像神は、このような江の川の支流に沿って多く祭られている。旧三谿郡は、その名が示すように東・南方からのはせん かんのせ さいじょう 馬洗川、北方からの神野瀬川、北西からの西城川の三川が合流する交通の要地である。江の川から入り、瀬戸内方面に出るにも、岡山県方面に向かうのも、ここを経由することになる。この地帯はまた、たかはし たいしゃくきょう なりわがわ 岡山県の西部を流れる高梁川の上流域と近い。有名な帝釈峡も、岡山県の高梁川支流の成羽川（広島県では東条川）に流れ込む渓谷である。このあたりは内陸水運の要衝であるとともに、岡山県を通って兵庫県まで続く吉備高原の西の入り口である。

この帝釈峡周辺は、縄文時代を中心とする多くの遺跡群で有名である。ここからは、九州南部に起源を持つ縄文前期（約6000年前頃）の轟B式土器が出土している^(注22)。この土器は、中国地方では山陰に多く分布し、山陽には少ない。形式から見ても、山陰から帝釈峡経由で山陽にもたらされたと見られている^[23]。この土器は、最近宗像市のさつき松原遺跡で、これに続く時期の曾畠式土器と共に出土している^[24]。これらの形式の土器は、遠賀川河口から下流域の多数の貝塚から出土しており、さらに海を渡って釜山市の東三洞貝塚など朝鮮半島南部の遺跡からも出土していて、北部九州海人族の広域活動で拡散したものと考えられている。曾畠式土器は沖ノ島からも大量に見付かっており、これらの土器の伝播に宗像から遠賀川河口付近の海人族が関与した可能性が高い^[25]。この時期に宗像神信仰がすでにあったかはわからないが、宗像海人族が縄文時代以来中国山間部とつながりを持っていたことが推定できる。

そのことをさらにはっきり示唆する例が、すぐ隣の地域にある。

弥生時代中期から後期のはじめにかけての中国地方や愛媛県などの諸遺跡から出土する奇妙な形の土器があり、その形から分銅形土製品と呼ばれる。図8の左に示した例は、弥生時代の出雲を代表する松江市の西川津遺跡から出土したもので、中期中葉のものと見られている。島根大学の三浦清氏らの研究によって^[26]、この土製品は岡山県北部から広島県北東部にかけて分布するクローム鉄鉱といきわめて希少な鉱物を原料として作られていることがわかった。またこの遺跡から出土した北部九州型の漁業用の石錘（弥生時代前期から中期）も同一の原料から作られていることがわかった。図8の鉱床分布に見るよう、この鉱物は先述の西城川、成羽川と岡山県の高梁川、鳥取県の日野川の上流域に分布している。上記帝釈峡は、その西端に当たる。そしてこの地域には、同図中に示すように、宗像神を祭る神社が集中的に分布する。西川津遺跡との関連について言えば、土地を離れられない農民に代わって、宗像神を祭る人々が原料の採取と運搬に関わったことを推測させる。

クローム鉄鉱に限らず、高梁川上流域には多くの鉱産資源がある。このことは弥生時代から知られていたらしい。その情報を弥生集落にもたらし、採取と運搬にも携わったのが、宗像神を祭る人々だったのではないだろうか。

鉱床が岡山県側に多いのと対応して、宗像系神社も岡山県側に多い。分銅形土製品の出土が岡山県に最も多いのと対応しているようである。これは宗像族が分水界を越えて瀬戸内方面へのルートを開拓していたことを示す。前述の例から見て、このような南北交通の起源は縄文時代にまで遡るようである。

ムナカタと縁のあるこの時期の出雲のその他の出土品に、中国系の土笛（陶埙）が挙げられる。西川津遺跡からは、隣り合うタテチョウ遺跡と合わせて、38個も出土している[27]。もちろん日本最多である。この土器の出土は、旧宗像郡の2個（宗像市と福津市）が最西端で、ムナカタ経由で日本海沿岸に広まったものと考えられている。

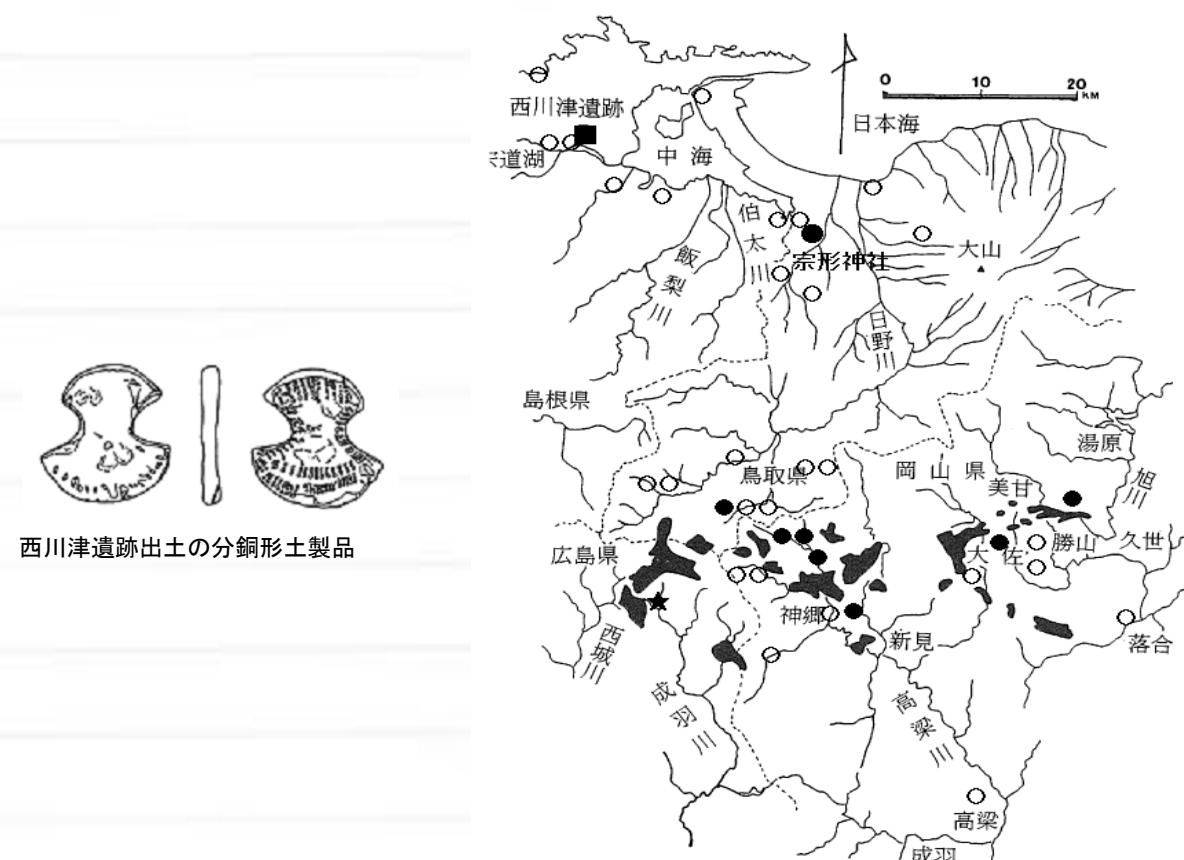


図8 西川津遺跡出土分銅形土製品の原料のクローム鉄鉱産地
および宗像神を祭る神社の分布（三浦清らの図を改変）

- 宗形神社 ● 純宗像系神社 ○ 宗像神を祭る神社
- ★ 帝釈峠 ■ 西川津遺跡

上記二例より以降に重要となったと思われる中国山地縦断ルートが、図9に示す丹波市の氷上回廊を通るルートである。このルートの分水界の高さは95mしかなく、重量物を水運で運ぶのに適している。このルートの入口は舞鶴港外の栗田湾に注ぐ由良川であって、河口から約10km遡った河畔にタゴリを祭る志高神社がある。福知山市東で土師川に入りさらに竹田川に入るが、このあたりにも宗像神を祭る神社が多い。竹田川流域には市島町という地名もある。丹波市春日町で本流と分かれ、黒井川を西流し突き当たる辺りにタゴリを祭る楯縫神社がある。ここを南に折れると分水界で、殆ど高低差なく加古川の流域に入る。このルートに沿って宗像神を祭る神社が多いが、中でも集中するのが、西方に分岐する万願寺川に沿った加西市域である。

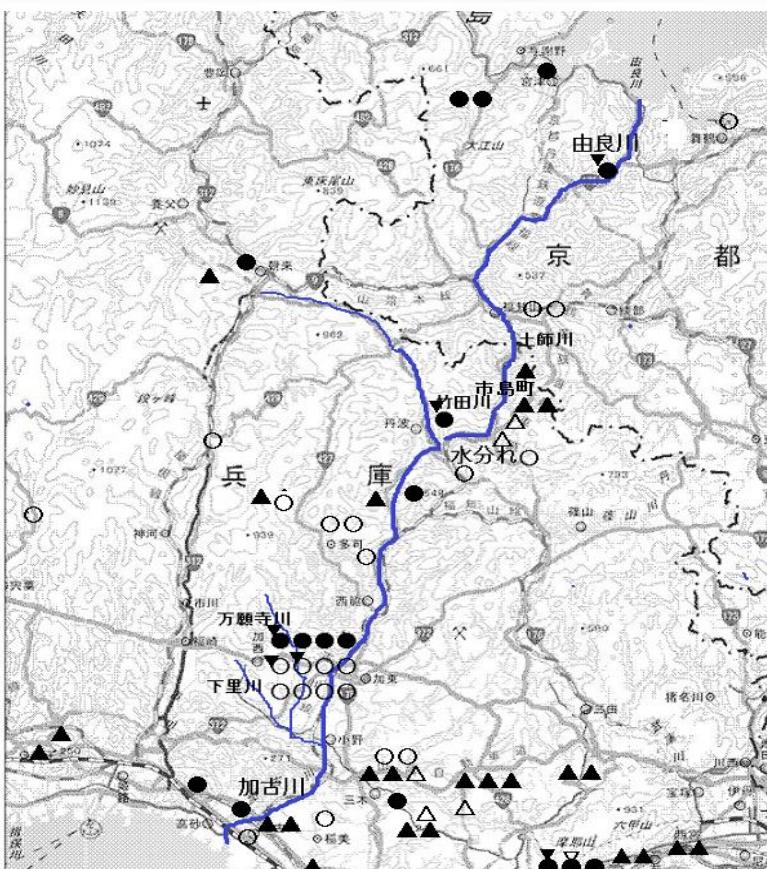


図9 兵庫県氷上回廊とその周辺の宗像神を祭る神社

(国土地理院地図を利用)

- 純宗像系神社 ○その他の宗像神を祭る神社 ▲宗像神のみを祭る巣島系社
- △その他の巣島系社 ▼を付したのはタゴリのみを、
- ▽を付したのはタギツのみを祭る神社を示す

いそべ

写真10に、加西市の三女神のみを祭る石部神社を例として示す。石部社が延喜式に13社も見えることを先に述べた。イソベを名とする神社（磯部と書かれることが多い）は全国で30社あるが、おおむね出雲系の神を祭り、宗像神を祭るのはここだけである。祭神名として多いのは、（天日方）^{あめひかた}_{くしひかたのみこと}奇日方命（以下クシヒカタ）である。上記分水界（水分れ）にあるイソベ神社も、この神を主神と

している。この神は『旧事紀』にオオナムチ三世の孫として出ていて、父はオオナムチとタギツとの子やえことしろぬしおかみ八重事代主神とされている。イソベ社に出雲の主神オオナムチよりもこの神が多いのは、このルートが比較的後で開発されたからであろうか。



写真 10 加西市上野の石部神社

このルートに沿って、宗像神でもタゴリを祭る社が多く、アジスキを祭る社もあることは、栃木県と同様鉄器の流入に関係があるようと思われる。このルートは、弥生時代後期に丹後に多くの鉄器製造基地が開かれた後、重量物である鉄を、鉄の欠乏していた畿内方面に運ぶために利用されたのではないか。

加西市とその周辺には、非常に多くの溜池が存在する。前述の宗像族の水理土木技術との関連も考えられる。出雲族などと協力してこの通商ルートを開発した宗像族の人々が、その技術を買われて住みついたものであろうか。この辺りは、加古川やその支流が山間部から平地に出る地形で氾濫を起こしやすかったと思われ、小雨地帯でもあるので溜池の必要性が大きかったであろう。

加古川河口付近に厳島系の神社が多いのには、安芸の厳島神社の影響もあると思われる。これに続く神戸市に、三女神それぞれを単独で別社に祭る三社があるのが注目される。その一つ、タギツを祭る三宮神社が神戸三宮の名になっている。

3. 9 宗像神が祭られた時期についての考察

以上の宗像神を祭る神社の分布状況を見ると、かなり多くの社が中世の流行神のような親神社からの勧請では全く理解できず、過去の宗像神を祭る人々の全国的活動を反映していると考えざるを得ない。そして歴史時代には、「解工」として推定される活動以外に、ムナカタの名のある人々が全国的に勢威を振るったという記録もないで、宗像族の広域活動は主に有史以前であったと考えられる。

そのような古代の活動は、縄文時代ムナカタ周辺に根拠を持っていた海人の広域活動に起源があつたように思われる。そこで養われた全国の地理や物産に関する知識の蓄積が、弥生文化の東漸に当たって大いに力を發揮したらしい。具体的には、北部九州に收まりきれない稻作農耕民集団が各地へ移住を企てる際に、有望地の紹介や水先案内を務め、その後の各集落間の交易や有用資源探索とその流通など、現代の総合商社的な活動を担っていたと推定することができよう。このような活動は、土地から離れにくい農耕民にとって、きわめて好都合であったと思われ、相互に持ちつ持たれつの関係を築いていたであろう。そしてムナカタから遠く離れた土地で強固な宗像神信仰が維持されているところから見て、各地域の求めによって定着していた場合も多かったに違いない。

このような広域活動は、中央集権国家が確立し律令体制が敷かれるとその余地がなくなり、秩序を乱すとされて規制されるようになったと思われる。歴史資料にその痕跡を求めるに、まず宗像三神が誕生する誓約神話がある。この「うけい」神話については別報で解析する予定であるが、それ以前に宗像神を祭る人々の活動が全国に拡がっていたにもかかわらず、この神話では三女神の活動を「海北道中」に限定していることが重要な意味を持つと考えられる。つまり「国内交易はもう結構だから朝鮮半島との交通路に活動を限定しなさい」という意味に受け取れるのである。

これと同一文脈の『日本書紀』の記事として、応神天皇の三年に、处处の海人が命に従わないので、
 阿曇連の祖大浜宿弥を遣わしてそのソバメキを平らげ、海人の宰としたことが載る。これは、
 これまで広く国内航路で活躍していた宗像海人族を締め出し、安曇族の首領に海人の統括を委ねたと
 解釈できる。このあと応神の五年に、「諸国に令して海人及び山守部を定む」とあるので、明らか
 に全国の海人を、諸国の国造を介して中央の統制下に置いたのである。

このような措置が取られた理由は明らかではないが、神功皇后伝説を信用するとすれば、平和的な通商活動を旨とするムナカタの海人が、四世紀後半以降と考えられる朝鮮半島への武力侵攻に協力しなかったのが理由ではないか。『日本書紀』によれば、宗像海人と関係があったと考えられる（あるいはその代表であった可能性がある）岡県主の熊鷗が^(注23)、はじめ仲哀天皇と神功皇后を大歓迎したのにその後の記述が全くなく^(注24)、朝鮮半島への航路に不案内な吾瓮の海人（新宮町沖の相島と考えられる）や磯鹿の海人（福岡市の志賀島と考えられる）に国見をさせて、後者が山から島が見えたというのでやっと渡海したという。案内役がいないため神功皇后が困った様子がわかる。住吉神の創始も神功皇后の出兵に絡んでおり^(注25)、宗像神に代わる朝廷に従順な海神（とそれを祭る海人族）が必要であったと思われる。神功皇后が実在の人物かは疑問があるにしても、広開土王碑文 [28]^(注26)から倭国が4世紀末から5世紀初めにかけて朝鮮半島南部に出兵していたのは事実であり、この伝説はそれを反映していると思われる。

四世紀後半に始まるとされる冲ノ島祭祀は、まさにこの時期に対応している。誓約神話が創られ宗像神が三神化されたのも、この頃ではないか。原則として古代氏族が複数神を祭ることはないので（祖神の家族神を共祭する場合は除き）、神名の性格が全く異なる三神が共祭されるのはきわめて異例であり、そこには政治的意図が感じられる。本報で見た祭神分布から、宗像海人族がはじめに祭っていたのはイチキシマ一神であったことは疑いない。

本報で見た宗像神の全国分布の特徴の多くは、ヤマト王権が確立したとされる4世紀以前の、宗像海人族の広域活動を反映していると思われる。

主として神社本庁が平成 7 年に公表した全国の神社データに基づいて、全国の宗像神を祭る神社の祭神の内訳およびその分布を調べた。その結果全国で 3500 社以上が宗像神を祭ることがわかった。そのなかで約 600 社は明治初期の神仏分離の際に八王子が牛頭天王八人の王子が記紀神話の三女神五男神に置き換えられたものと推定されたので、これを除く約 2900 社について、都道府県別の分布とその内訳を検討した。

宗像神は、沖縄県を除く全国の都道府県で祭られている。広島県の 240 社が最も多く、宗像大社お膝元の福岡県は 141 社と全国で五番目であり、全神社に対する比では全国の平均以下に過ぎない。

宗像神は、その誕生神話にあるように三神がセットで祭られていることはそれほど多くなく、全体の 28%に過ぎない。最も多いのはイチキシマー神を祭る神社で、1755 社と全体の 60%を占める。その比率は関東・東海・近畿の各県に多い（三女神には非常に多くの表記があるので、各神の全表記をそれぞれタゴリ・タギツ・イチキシマで代表させる）。その他の二神のそれぞれ単独と、三神のうちの二神の組み合わせはおおむね少ないが、栃木県ではタゴリのみを祭る神社が 61 社と突出して多い。

イチキシマー神を祭る神社が多いことについては安芸の嚴島神信仰や近世の弁天（弁才天）信仰の影響が考えられるが、解析の結果これらが祭神分布に大きな影響を与えてはいないと考えられた。

多くの神社が宗像神を祭るにもかかわらず、ムナカタ（ムナガタ）の名を持つ神社は 69 社と少ない。その表記には宗像だけではなく、胸肩、胸形、宗形、宗方などの古名を持つ社がある。古名を持つ社の多くは宗像からは遠方の社で、とくに津軽に 7 社の胸肩神社があるのが注目される。このほかに宗像神のみを主祭神とする社はかなり多く、これを合わせると純ムナカタ系社は少なくとも現在でも 950 社以上存在する。

古代の歴史史料で見ると、平安時代の延喜式神名帳えんぎしきじんみょうちようにムナカタの名のある神社が 7 社あり、そのほかに隠津島などムナカタ系の名の神社が 6 社ある。これは祭神のわかる式内社ではベスト 8 に入る。その他歴史史料に出る神社と現在宗像神を祭る神社を加えると、福島県から鹿児島県まで、全国の 56 の古社に宗像神が祭られている。その他断片的な記録から、延喜式神名帳に採録されにくい地方では宗像神がさらに高い比率で祭られていたと推定される。

現在の神社名を多い順に並べると、15 位以内にムナカタの 7 社を上回る数の式内社がある神社名はない。すなわち現在の神社名はほとんど、中世以降の流行神による名になっているのである。古代以前に起源を持つ神で現在最も多く祭られているのは大己貴命（大国主命）などと書かれる出雲の主神で、今でも全国 6000 社以上で祭られているが、現在の社名には殆ど残っていない。宗像神は古代の神のうちではこれに次ぐ数の神社に祭られている。このことから、神社名を調べるだけでは古代以前

からの信仰の姿は全くわからないこと、しかし祭神としてはかなりの比率で残っているので、これを集計することでその姿が見えてくることが確認できる。

次に上記の集計結果から、宗像神が特に集中して祭られている地域の状況を、文献資料や考古学的知見などと対比して検討した。

津軽地方には、『平成データ』に他の文献を合わせると 12 社の胸肩神社と 1 社の宗像神社が記録されていて、そのほかに古来宗像神を祭ることが明らかな善知鳥神社などがある。江戸時代の記録では多くの多くは弁天宮と呼ばれていたが、少なくとも 2 社に胸肩の名が、一社に棟方の名があるので、ムナカタは古くから伝えられてきた社名と思われる。これらの分布と重なって、4 力所で弥生時代前期から中期はじめまでの水田跡が発掘されており、遠賀川系土器も出土している。秋田市にも胸形神社があり、その近くに弥生前期の集落も見出されているので、これらムナカタ社の起源は弥生時代に遡る可能性がある。また津軽の宗像神の分布域に重なって、全国で他に例がない 8 社の物部系高倉神社が集中する。これも宗像市の隣町岡垣町の高倉神社との関連が考えられる。

栃木県には、三女神のうちタゴリのみを祭る社の数が 61 社と、全国で突出している。その社名で最も多いのは滝（瀧）尾神社で、これは日光山内の日光二荒山神社別宮の瀧尾宮から広まったと見られる。日光二荒山神社は大己貴命と味耜高彦根命（大己貴命とタゴリとの間の子とされる）の出雲二神を共に祭る。この二神も栃木県が国内最多である。多くの日光系の神社の殆どは、これら三神の一神以上を祭る。栃木県には 2 社の胸形神社があるが、その 1 社はタゴリのみを祭るので、今は三女神を祭る式内社（延喜式には一座）もやはりタゴリを祭っていたと見られる。この両社は思（ニ田心）川に沿っており、タゴリ信仰はその流域を経て日光に入ったと見られる。味耜高彦根命は鉄器文化との関係が指摘されており、宗像神の分布と鉄器の出土状態から、タゴリと味耜高彦根命への信仰は弥生時代後期ころ千曲川を遡り毛野国へ入り、利根川から思川流域に達したのではないかと思われる。

千葉県の国内最多の 13 社の宗像神社群は印旛沼に沿っていて、西方には物部の祖神饒速日命とその家族を祭る 19 社の鳥見神社群があり、沼を挟んだ東方に地元の祖神を祭る 15 社の麻賀多神社群が分布する。大和の鳥見山の北麓の櫻井市外山に式内の宗像神社があり、その西麓には本来饒速日を祭っていたと思われる等彌神社がある。上記の鳥見は大和の同地名から来たと思われ、宗像と物部とは大和以来の繋がりと考えられる。饒速日を祭る神社がこのように集中的に鎮座する例は他にないので、この人々は物部本宗家に近い人々が集団移住した可能性が強い。その動機としては、物部本宗家が敗れた 587 年の「蘇我・物部戦争」が考えられる。本宗家に近い人々が畿内を脱出するとき、古くから縁が深く地理的知識の豊富な宗像族の人々に移住先の案内や紹介を頼んだのではないか。神社の配置から、宗像族はそれ以前に印旛沼干拓のため入植していたと思われる。宗像族が土木技術に優れていたことは、文献に出る。

広島県には全国最多の宗像神を祭る神社があるが、その分布は必ずしも安芸の嚴島神社がある海岸部にばかり集中していない。最も密度が高いのは内陸部の旧三谿郡で、ここは江の川本流（可愛川）へ北・東・南から支流が流れ込む内陸水運の要衝であるとともに、岡山県を通って兵庫県まで続く吉備高原の西の入り口である。すぐ東の帝釈峠周辺は、縄文時代を中心とする多くの遺跡群があり、そこで九州南部起源の轟B式土器が出土している。この土器は、宗像市を含む九州北岸の多くの遺跡から出土しており、海を渡って対馬や朝鮮半島南岸のいくつかの遺跡からも見付かっているので、北部九州の海人が広めたものと見られている。中部地方では島根県の沿岸で多く、瀬戸内地方には少ない。山陰から帝釈峠附近を経由して山陽へ達したと見られている。

海人族が内陸部の水運にも携わったことをよりはっきり示すのは松江市の西川津遺跡で、ここから出た弥生時代中期の分銅形土製品と石錘が、吉備高原の北の山岳地方に広く分布する鉱物を原料として作られていることがわかっている。そして宗像神を祭る神社が、西川津遺跡附近から式内の宗形神社のある米子へ出て、日野川を遡りその鉱床に達するまでの途中に多く、特に日野川の上流と岡山県新見市の鉱床中心地に集中する。西川津遺跡からは上記轟B式土器も出土しており、九州海人族とのつながりが縄文時代から始まっていることが分かる。宗像市と福津市が伝播の起点となっている中国系の弥生の土笛も、ここで全国最多の数が出土している。

この時期以降に重要となったと思われる中国山地縦断ルートが、丹波市の氷上回廊を通るルートである。このルートの分水界の高さは 95m しかなく、重量物を水運で運ぶのに適している。弥生時代後半山陰地方への鉄器流入が活性化し、後期～終末期になると丹後地方で鉄器製造が行われ、多くの鉄器が保有されていた。一方「畿内」の中央部にはこの時期殆ど鉄器が見られないが、古墳時代に入ると鉄器の出土が急増する。考古学的な証拠は十分ではないが、このルートの重要性が高かったと推定される。このルートにも、入り口の由良川河口のタゴリを祭る志高神社はじめ、ルートに沿って多くの宗像神を祭る神社がある。出口に近い加古川支流の万願寺川流域には宗像神を祭る古社が集中し、河口付近から畿内へ向かう辺りにも嚴島系を中心とする宗像神を祭る多くの神社がある。

以上のような宗像神を祭る神社の広域的な分布状況を見ると、その大半が中世以降の流行神のような親神社からの勧請ではなく、宗像神を祭る人々のかつての全国的活動を反映していると思われる。そしてムナカタの名のある人々が歴史時代全国的に勢威を振るった記録もほとんどないので、宗像族の広域活動は主に有史以前であったと考えられる。

このような古代宗像族の活動は、縄文時代の海人の広域活動に起源があったと思われる。そこで養われた全国の地理や物産に関する知識の蓄積が、弥生文化の東漸に当たって大いに力を發揮したらしい。具体的には、北部九州に收まりきれない稻作農耕民集団が各地へ移住を企てる際に、有望地の紹介や水先案内を務め、その後の各集落間の交易や有用資源探索とその流通など、現代の総合商社的な活動を担っていたと推定される。

このような自由奔放な広域活動は、中央集権国家が確立するとその余地がなくなり、規制されるようにならざるを得ない。宗像三女神誕生の誓約神話には、三女神の任務が「海北道中」に限定されている。これは、祭神分布から推測されるそれ以前の宗像族の全国的活動のイメージと大きく異なる。この神話は、宗像の海人が国内交易活動から軸足を移し朝鮮半島へのルートの業務に専念することが求められたと受け取れる。神話の時代以降『日本書紀』に海人としての宗像族に関する記事がなく、他の海神や海人に関する記事のみが見えるのも、この推定を支持する。

このような措置が取られた理由としては、平和的な通商活動を旨とする宗像海人族が、4世紀後半以降のヤマト王権の朝鮮半島への出兵に、はじめは協力しなかったためではないか。4世紀後半に始まるとする沖ノ島祭祀は、まさにこの時期に対応している。誓約神話が創られ宗像神が三神化されたのも、この頃ではないか。神名の性格が全く異なる三神が共祭されるのはきわめて異例であり、そこには政治的意図が感じられる。

以上のことから、本報で見た宗像神の全国分布の特徴の多くは、ヤマト王権が確立したとされる4世紀以前の、宗像海人族の広域活動を反映していると思われる。

注

(注1) 「津屋崎古墳群」は、そのうち保存状態のよい41基の「新原(しんばる)・奴山(ぬやま)古墳群」に最終的に絞られた。

(注2) 応神紀37年阿知使主(あちのおみ)が天皇の命令で吳(くれ)から連れ帰った工女の一人を胸形大神が所望した件と、履中紀5年筑紫の三神(宗像神とされる)が宮中に現れて「なぜ我が民を奪うのか。後悔することがあるであろう。」と脅かしたが、宮廷では祈っただけで祭りを行わなかった件など。

(注3) このような「名寄せ」による集計では、把握できなかった祭神表記が発見される可能性が排除できない。従ってここで記す神社数は、下限の値と認識しておかねばならない。

(注4) 本報ではいずれも岩波文庫版 [4] [5]による。

(注5) 岩波文庫版『日本書紀』には、タゴリは「タコリ」、イチキシマは「イツキシマ」という古訓を採用している。

(注6) 現存神社数は、この表の数字をかなり上回ると思われる。それはまず、現在も存在しているにもかかわらず収録されていない神社があるからである。宗像市内でも、昭和7年の『宗像郡誌』[7](以下『郡誌』)では大島に中津宮以外に12社が記録されており、現在も中津宮とその境内社を除いて少なくとも8社以上の神社が確認されるにもかかわらず、全く登録されていない。これは、これらを管轄する宗像大社が一括して登録している、という理由によるらしい。『郡誌』の12社と確認した8社の名はほとんど一致しないので、大島には12社を上回る数の神社があったことになる。ムナカタを名乗る神社でも、後述の秋田市河辺町に胸形神社が現存し、『河辺町史』(昭和60年)にも記載されているが、この神社は『平成データ』に入っていない。

また記載に祭神が欠落している神社も多少ある。特に兵庫県の旧神崎郡には、多くの神社に祭神の記載がない。

表3の全国の宗像神を本殿に祭る神社数3532社は、『調』の4370社に比べ19%少なく、『平成データ』の全社数の昭和20年の全社数からの減少率22%にはほぼ見合っている。社数についての『調』の調査が、かなり信頼できることを示している。そして戦後の神社の廃絶がある程度あったとしても、『平成データ』の捕捉率にある程度の限界があることをも示す。従って以下の検討では必要に応じて『調』を参照することにする。

(注7) 牛頭天王信仰は仏教に起源を持ち中国で発達した俗信であるが、奈良時代までには日本に入り、疫病よけの祇園信仰となつてのち全国に広く流行し、夏の祇園祭や茅の輪くぐりなどを生んだ。

(注8) 延喜(えんぎ)5年(905)編纂が開始され延長5年(927)に完成した格式(律令の施行細則)を、延喜式という。その中に官社に指定された全国の神社2861社(祭神3132座)の一覧である神名帳(じんみょうちょう)があり、「延喜式神名帳」と呼ばれる。これに含まれる神社を「式内社」と呼ぶ。大小の区別があり、大社の中には神験が高いとされて名神祭(みょうじんさい)を受ける社があって、これを名神大社(略して名神大(みょうじんだい))と呼ぶ。ムナカタでは宗像神社と織幡神社が名神大である。式内社は、その性格上五畿内とその周辺に多く、地方には少ない。東北は南部に限られる。

(注9) 田井信之の『日本語の語源』[8]によれば、「ウ」音が弱化すると「イ」音になる古代の例は多い。特に「イ」がはじめにあるとき、音韻調和でイツクがイチキになるのはごく自然である。巖島(いつくしま)の名は、最も古い音を留めていると思われる。

(注10) 弁天様になったのは、イチキシマだけではなく記紀神話のウカノミタマなどの別神もある。ウカノミタマは倉稻魂あるいは宇迦之御魂などと書かれる日本の代表的な穀物の神様(穀靈)で、稻荷神社の主祭神である。しかし『平成データ』には、ウカノミタマを祭る弁天社は三社(福島・長野・愛知県)しか見えない。うち福島・長野ではイチキシマをも祭っている。

宗像神でも、タゴリのみ(山形・長野)とタギツのみ(神奈川2社)を祭る弁天社もある。そのほかに豊玉姫(静岡・千葉)、瀬織津姫(静岡・富山)を祭る場合もある。一部の地方では、その土地で強い信仰を集めていた女神が弁天様とされたのではないか。このことは、弁天信仰が広まる以前に、イチキシマ信仰がかなり広く存在し、かつ深かったことを示唆していると思われる。

(注11) 宗像神のない4社のうち、三次市の宗像神社は、『宗像神社史』・『調』にタゴリ、今治市の宗方八幡神社は『神社史』『調』にイチキシマとしている。諫早市と山鹿市の宗方八幡神社は小字宗方にあるので、かつては宗像神が祭られていたと思われる。土佐市の宗像神社は祭神が記されていないが、『宗像神社史』と『調』にはイチキシマとある。

(注12) 『日本書紀』以降『日本三大実録』までの六国史に見える神社で、通常は式内社以外をいう。そのほかの史料に見える神社も含めることもある。

(注13) 貞觀(じょうがん)5年(863)の太政官の命により諸国の国司が作成・提出した神名帳で、現在18国の神名帳が残る。

(注14) 『宗像神社史』と『調』が同一資料(「神社明細帳」)に基づいていることを示唆する。

(注15) 繩文土器の技法を残しながら遠賀川式土器を模倣した土器をいう。最近は「類遠賀川式土器」という名称も使われる。

(注16) 他に岡山県の大倉神社に大倉主が、長崎県の和多都美神社と遠賀郡の他の二社に両神が祭られるのみである。

(注17) これら社名の関係は、はじめフタアラ(フタラ)と呼ばれていた社名が二荒と表記され、これがニコウとも読まれたため、好字を当てて日光の名になったと考えられる。

(注18) 『古事記』にアジスキを謡う歌謡があり、「み谷二(ふた)渡らす」とあるので、一般に雷神と考えられている。しかしこれが製鉄または鉄器製造の情景を表すと考える人もある。大和の鴨族の主神でもある。

(注19) 1社は香取鳥見神社と称し香取神宮の神である経津主命(ふつぬしのみこと)を、また1社は鳥見愛宕神社と称し愛宕神を共祭しているが、その他は全てニギハヤヒのみか、これにニギハヤヒの后神御炊屋(みかしきや)姫(登美屋(とみや)姫ともいう。トミにゆかりの名前である)やこの両神の子宇摩志摩治命(うましまじのみこと)(表記はいずれも多様)を共祭する。いずれも『日本書紀』神武紀で、神武天皇が大和に入ったときそこを治めていた一族の名である。

(注20) 平安時代中期に作られた辞書『和名抄』(和名類聚抄)の印旛郡に言美郷が記されているが、これは登美の誤りかとされる[21]。

(注21) 宗像族がこのような水理土木技術を身につけたのかは、かつて宗像に深い入り海があつて、その後水田地帯に変わったこととの関係があると思われる。この点は別途考察が必要である。

(注22) 熊本県宇土市の轟貝塚から名付けられた。後出の曾畠式も、同市の曾畠貝塚により名付けられた。

(注23) 遠賀川河口部一帯は、かつてオカと呼ばれていた。

(注24) 熊鷗は、仲哀天皇を周芳の沙摩（さば）の浦（防府市佐波）まで迎えに来て、船に立てた賢木（さかき）に掛けた三種の神器（珠・鏡・剣）を献呈し、穴門（あなと）（長門）から向津野（むかつの）大濟（おおわたり）（宇佐市付近か）までを東の門とし、名護屋大濟（北九州市戸畠区か）を西の門とする地域を魚塩（なしお）の地（魚や塩を取る土地）として進呈し、没利（もとり）嶋（六連島（むつれじま）とされる）・阿閉（あへ）嶋（藍島とされる）を御宮（みはこ）（食料供給地か）とし、柴嶋（洞海湾にかつてあった島という）を御籠（みなえ）（魚を捕るところか）とし、逆見海（さかみのうみ）（北九州市若松区の逆水か）を塩地（しおどころ）とすると言ったという。熊鷗の勢力の大きさがわかる。

(注25) 出兵に懷疑的であった仲哀天皇に崇ってその急死の原因となった神であり、神功皇后が凱旋後北部九州から畿内入りする途上で始めて祭られた。

(注26) 中国吉林省集安市にある高句麗（こうくり）第19代の広開土王（好太王）の業績を讃える碑に刻まれた1800字余りの文。同碑に414年建立と刻まれている。391、399、400、404の各年に倭が新羅・百濟に派兵していたことを示す記事がある。

参考文献

- [1] 宗像神社復興期成会, 『宗像神社史』 上巻・下巻, 1961, 1966.
- [2] 宗像神社, 宗像神社史料第二輯『宗像三神奉齋神社調』, 1944.
- [3] 神社本庁, 『全国神社祭祀祭礼総合調査（平成七年）』, 2005.
- [4] 坂本太郎他校注, 『日本書紀』（一）～（五）, 岩波書店, 1994-2005.
- [5] 倉野憲司校注, 『古事記』, 岩波書店, 1963.
- [6] 園田稔ほか編, 『神道史大辞典』, 吉川弘文館, 2004.
- [7] 伊東尾四郎編, 『宗像郡誌』, 臨川書店, 1986.
- [8] 田井信之, 『日本語の語源』, 角川書店, 1979.
- [9] 川添昭二他校訂・加藤一純・鷹取周成編, 『筑前国続風土記付録』（上）（下）, 文獻出版, 1977-1978.
- [10] 式内社研究会編, 『式内社調査報告』 第1卷～第24卷, 皇學館大學出版部, 1978-1990.
- [11] 三橋健, 『神道大系 神社編 総記』（上）, 神道大系編纂会, 1986.
- [12] 岡田莊司他編, 『現代・神社の信仰分布』 文部科学省21世紀COEプログラム國學院大學「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」, 2007.
- [13] 日本歴史地名大系第2巻『青森県の地名』, 平凡社, 1982.
- [14] 加藤慶司, 『古文書による津軽の神社縁起』, （自家出版）, 1995. などによる
- [15] 菅江真澄, 『菅江真澄全集第一巻』, 未来社, 1971.

- [16] 松尾奈緒子, 『九州考古学第87号』, 九州考古学会, 2012.
- [17] 鎌田純一, 『先代舊事本紀の研究 校本の部』, 吉川弘文館.
- [18] 萩原千鶴, 『出雲国風土記 全訳注』, 講談社学芸文庫, 1999. による
- [19] 保科正之, 『神道大系 続論説編[14] 會津神社総録』, 神道大系編纂会, 2002.
- [20] 小倉博, 『印旛沼—自然と文化—No.1』, 印旛沼環境基金, 1994.
- [21] 館野和己, 『日本古代村落・都市空間の形成と変遷の復元』, Nara Women's University Digital Information Repository, 2004-2005.
- [22] 宗像市史編纂委員会編, 『宗像市史通史編』 第二巻, 宗像市, 1999.
- [23] 李相均, 『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』 12. pp. 113-167, 1994.
- [24] 白木英敏, 『むなかた電子博物館紀要』 第2号, 2010.
- [25] 古澤義久, 『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』 28. pp. 27-80, 2014.
- [26] 三浦清他, 『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）』 23-1. pp. 1-6, 1998.
- [27] 『松江市史 資料編2』, 2012. などによる
- [28] たとえば 井上秀雄, 『古代朝鮮』, NHKブックス, 1972.